ゼロの使い魔～ハルケギニア統一に向けて～

浦波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔～ハルケギニア統一に向けて～

【Ｎコード】
Ｎ６８３４Ｘ

【作者名】
浦波

【あらすじ】
ゼロ魔世界の貧乏貴族に憑依した北郷。
環境は最悪だが彼は全く気にすることなく、ハルケギニア統一を目指す。
自分のために。

1　憑依（前書き）

この小説はアンチものです。

原作キャラでも関係なく死にますし、生まれない可能性も高いです。
この主人公は究極の自己中心的性格で外道な事も普通にします。

そういった設定が嫌いな方は読まない事をお勧めします。

1　憑依

気付いたらまた子供に戻ってました。

「…は～～～…またか」
もう既に慣れたので別に焦りもしなかった。
俺の名前は北郷一刀。
もう説明するのは飽きたから詳しい事は前作を読んでくれ。

俺はもう世界を３つ体験している。
一つ目は普通の世界、生まれ育った世界でクソみたいな人生だった。
２つ目は恋姫の世界。
原作キャラをほとんど皆殺しにして超大国を築いた。
３つ目は戦国時代。
超マイナー武将の肝付兼続に憑依して日本統一の後に世界に進出。
世界の半分を支配した。
そして新たに４つ目はこの世界。
ここまで世界を渡り歩いたのは俺ぐらいだと思う。

にしても今回はガキからのスタートか。
前回の世界では確か西暦２０００年ぐらいまで生きてたな。
２０００年になってから急激に老いだして間もなく死んだ。
遂に寿命が尽きたんだろう。
死因は老衰だったからまぁ幸せな死に方かな？
俺の死後、日本がどうなったかは知らないがどうでも良い。
一応晩年には俺がいなくなっても問題無い程の生産能力を手に入れたし、優秀な官僚達がいたからしばらくは保つ筈。

それからは新しい世代が考えれば良い。
５００年ぐらい国の発展に貢献したんだ、誰にも文句は言わせない。

前の世界のことはもう良いや。
大事なのは今だからな。
さて、先ずは環境のチェックだが。
周囲は森や湖がある自然豊かな環境だが、湖には小さな船着き場や手漕ぎの木製ボートがあることから多分庭園かな？
ということはこの体の持ち主は身分が高い可能性がある。
ただ単純に公園の可能性もあるがな。
しかし遠くの方にデカイ屋敷みたいなのが見えるから庭園の可能性の方が高い。

次に俺の体は背丈や手足の大きさから3歳ぐらいと思われる。
服装は上等な素材だし、恐らく高いと思われる装飾品も身に付けている。
服装のセンスは中世ヨーロッパに近く、文明もそれぐらいだろう。
湖に自分の姿を映してみると、そこには茶髪にブラウンっぽい黒眼で顔つきは西欧系の子供がいた。
顔のレベルはそこそこ高いと思うが、それは日本人から見たら高いと思うレベルで、ヨーロッパの中では多分普通ぐらい。
少なくとも凄いイケメンでは無い。
映画で言えば主人公には絶対なれない、エキストラが精々だろう。
まぁいいさ。
別に顔にこだわりは無い。
元々は大したことが無かったのだし、むしろ前よりは良くなったのだから文句は無い。

　それより重要なのは能力だ。
俺には特典なのか呪いなのか分からないが、ある特殊能力があった。
それはコピー。
物体ならあらゆる物を無限に複製出来た。
この能力を授けたのは神なのか悪魔なのかは未だに分からないが、
これがあったからこそ生きてこれた。
だから能力は何よりも大事なのだ。

しばらく調べた結果、この世界でもコピー能力はあったし、特に変わりも無かった。
それと、前の世界同様、前回得た知識は継承されてるし、紙媒体の物ならコピーで出せた。
この世界は恐らく中世ヨーロッパ時代だから大いに役に立つだろう。

　さて、そろそろこの世界について探ろう。
幸いにもこの体の持ち主はそれなりに裕福な家に住んでるらしいし、
時代的に多分貴族階級なんだろう。
流石に中世ヨーロッパと思われる世界で平民からのしあがるのはかなりの苦労だからな。
ガキっぽい演技をしながら情報を得れば良い。
それに何か後ろから使用人っぽい奴等が歩いて来ているから丁度良い。
出来れば現実世界に近いと良いなぁ…。

2　悲惨な環境

迎えに来た使用人達に演技をしながら情報を探った所、信じたくない事実が発覚しました。

ここゼロ魔らしいです。
マジかよ……。
ゼロ魔って魔法と貴族の素敵世界じゃねぇか。
今まで様々な世界をいったけど、魔法世界は初めてだ。
大丈夫か？　俺？

ちなみに俺の名前はハンス・フォン・ルドルフ。
ゲルマニアの子爵家の次男らしい。
子爵かよ…。
また地味な階級だな。
父は火のトライアングル、母は土のラインの微妙な一族。
ヤベェ、才能まで微妙だ。
ちなみに長男は１３歳でラインになっているのでルドルフ家の期待の星らしい。
だから両親共に長男に期待しているから次男の俺にはあんまり関心無いようだ。
俺になってからも大した会話をしてないし、食事の席でも俺には目もくれずに長男に話しかけている。
普通のガキなら泣いてるぞ？
３歳って一番愛情が必要な年齢だと思うし。
まぁ俺には好都合だがな。
おかげで俺に変わったのに両親は全く気付かない。

長男も俺にあんまり愛情を感じてないらしい。
すれ違っても無視だし、こっちが話しかけても短い返答だけで直ぐに去る。
マジでこの体の持ち主不憫。
家族からは愛情を全く浴びれてないし、両親の態度からか使用人もあんまり付けられていない。
一応最低限はいるがそいつ等の態度も仕事だからと付き合ってるだけ。
これが現代なら下手すりゃ自殺してるぜ？
絶対マトモな性格には育たねぇ。
多分憂さを晴らすために平民に当たる大人になるだろう。
乗っ取っておいて何だが同情するよ。

まぁ良いや。
既に消えてしまった人間だし、俺にとっては逆に好都合な環境だから文句無い。
普通に食事は出るし、自室もある、3歳なのに小遣いも出る。特に問題無い。
唯一不満なのは杖を支給されないことだ。
流石に3歳のガキではまだ魔法を習うには早すぎる。
長男だったらまだしも、ロクに注目されていない俺では相手にもされないだろう。
更に不満なのは知識を得られにくい事だ。
3歳で本を読むには早すぎるから本の閲覧許可が降りない。
子爵家と言えどそれなりの数の蔵書はあるが、マンガみたいに3歳児でも分かるような簡単な物は無く、活字だらけの内容が難しいので俺が読むのはおかしい。
製紙技術や印刷技術が低いこの世界では本は貴重品だからしっかり管理されていて読めない。

他のオリ主達ならそんな事は気にせず親にせがみ、見事に読んで天才とか祭り上げられるが、俺は注目なんかされたくないからしない。
注目されれば間違いなく嫉妬や警戒心を生み、排除に動く。
人間では制御出来ない感情だからどうしようもない。
少なくともまだ大々的に動く時ではない、今はちょっと賢い3歳児を演じるしかない。

唯一俺に許される勉強は礼儀作法だけだ。
僅か3歳に理解出来るのかよ？　と疑問だが、腐っても貴族だから執事にみっちり教えられる。
しかしこれが面倒くさい。
本当なら一度教えられれば理解出来るのだが、それでは賢い子と思われてしまうので何回か分からないフリをしたり、飽きたフリをする。
飽きたフリはフリじゃないがな。
だってこれでも皇帝やってたんだぜ？
礼儀作法なんて一通り覚えたから今更復習するなんて面倒なだけだ。

しばらくはこれが続くな。
礼儀作法や貴族らしい話し方、貴族としての態度、平民への接し方等の洗脳教育だ。
内の両親も他の貴族同様、平民蔑視の感情が強く、無礼討ちやとんでもない税金をかけるなど、いかにもなバカ貴族だ。
税金を上げるから経済が発達せず、税収入が減るというのが理解出来ないのか？
家庭教師からも平民をつけ上がらせないために度々締め付けるべきとか教えられるけど、それが間違いとは思ってもないらしい。
こんな無能に習うのは屈辱的だが今は無力な子供だ。
周囲の環境に溶け込むために貴族の子供らしく振る舞おう。

少なくとも魔法を手に入れるまでは。

ちなみに現時点でコピー出来た魔法はクソ兄貴の魔法練習を見て覚えたレビテーション（浮遊）、ロック、アンロック、ライト、ディテクトマジック（探知）などコモン魔法や、発火、ファイヤーボール等の攻撃魔法も覚えた。
ちなみに兄貴の系統は火だ。
だから覚えたのも火が中心。
しかし才能溢れるお兄様は素晴らしい事に土系統も使える。
だから練金や固定化も見せてもらった（覗き見）。

これで良い。
ていうかゼロ魔で最強ってこの２つじゃね？
基本魔法の癖に原子配列を自由自在に変えれる魔法と、どういう原理か全く分からないが腐敗や傷を防止する魔法。
マジこれ以上のチートは無い。
これに比べたら虚無なんか無価値だ。
何でこれをもっと有効活用しないのか理解不能だ。
練金を使えば簡単に新物質が作れるし、固定化使えば何千年も変質を防げる。
この２つを有効的に使えば軽く現実世界を凌駕出来る。
なのにこの世界では練金で鉄屑を作り、固定化では食品の腐敗や建物の保全に使うぐらい。
意味分かんない。
現実世界の科学者が知ったらぶちギレそうなくらい宝の持ち腐れだ。

でもこんなに便利な魔法をコピー出来ても使えない。
何せまだ杖すら握った事が無い。
バレれば先住魔法か異端扱い受けるだろうし、１００％他の貴族や皇帝に目を付けられて二次小説みたいに利用されるのがオチだ。

利用し合うのはまだ良いが、一方的に利用されるのは虫酸が走る。
だから今は待つ時だ。
いずれ起こす時のために今はバカなガキを演じる。

3　現実は厳しい

この世界に来て2年経ち、5歳になった。

新たな新事実が発覚した。
どうやらこの世界は原作の30年ぐらい前の世界らしい。
色々調べたらトリステインの国王が生きていてアンリエッタもまだ生まれてないし、ガリアの王もジョゼフじゃない。
これは良いニュースだ。
何せ原作の年では虚無やレコン・キスタ、ジョゼフ、ロマリア、エルフ等の面倒事が一気に勢ぞろいする。
明らかに異常過ぎる程にイベントが目白押しだ。
もしもこんな時代に生まれたら何もせずに原作が去るのを待つしか無かった。

とにかくこれで行動方針は決定した。
原作みたいに虚無が揃う前に、少なくとも虚無の使い手を生け捕るか最悪殺さなくてはならない。

殺すとまた別の奴等が虚無に目覚める事になるが、少なくとも原作の奴等よりかはマシだ。
特に警戒すべきなのは今はまだ王子だがジョゼフ、そしてロマリアのヴィットーリオだ。
ヴィットーリオはロマリア教皇という地位以外は大した危険性は無いが、ジョゼフは虚無が無くてもヤバイキャラだ。
アイツ魔法なんか使えなくても充分チートキャラだし、オマケにそこに虚無とニョズニトニルン、エルフが付くからまず勝てない。

アイツ間違いなく最強だよ。
むしろ一番主人公にふさわしいかも知れん。
だからジョゼフは早く殺さなくてはいけない。
出来るなら戴冠前に。
それなら虚無に目覚めていないし、継承権争いで弱小だったから守りも少ない。
殺しても継承権争いで暗殺されたと誤魔化しやすいしな。
ジョゼフが死ねば自動的に王位は弟のシャルルが引き継ぐ事になる。
シャルルは魔法は天才的だが王としては微妙だろう。
ジョゼフに簡単に暗殺された事から明らかだ。
シャルルが王位につけばガリアもそこまで恐る必要は無くなる。
精々が諜報組織を警戒する程度で良い。
元素の兄弟とか面倒な奴等もいるが、ジョゼフに比べたら簡単だ。
どんなに強くても所詮は個人。
人間は群れなきゃ弱い生き物だ。

さて、未来の話も良いが今は現在の話に移ろう。
5歳になったんだからそろそろ杖をねだる。
優秀なお兄様も5歳で杖を手に入れたらしいし、それに倣えば俺が杖を欲しても不思議は無い。
そう思った俺は滅多に来ない親父の執務室の前に来てノックした。
「…誰だ？」
「ハンスです。お話したい事があります」
「……入れ」
そう言われたのでドアを開けた。
「失礼します」
部屋にいた親父は執務中なのか書類を見たままで俺を見ようともしない。

「…何のようだ？」
話しかけるがやはり書類から顔は上げない。
「お仕事中失礼します。
私も5歳になりました。
ですから兄上同様魔法を覚えたいので杖が欲しいのです。
出来れば教師も一緒に」
親子の会話とは思えないな。
上司と部下の会話だ。
「……よかろう。
杖と教師は用意する。
もう用は無いのなら下がれ」
「はい、ありがとうございます。
失礼しました」
礼をした後、部屋を出た。
ちなみに親父は終始一度も俺を見なかった。

あそこまで露骨だと逆に関心するな。
まるで自分の子と思っていないような態度だな。
もしかして俺って愛人の子か？
それとも養子？
……まぁ良いや。
別に親子の情なんかいらないし。
逆に俺にとっては好都合過ぎて嬉しいぐらいだ。
杖は手に入るし、一応指導員もくれるらしい。
もしかしたらまだコピーしてない魔法を見せてくれるかも知れない。
とりあえずは杖と教師を待つか。

数日後、使用人経由で杖を渡された。
材質はそこそこでやはり期待はしてなくても自分の息子に貧相な杖

を持たせる訳にはいかないからか上等な物だ。
別に杖なんてそこらの木の棒でも良いからどうでも良いけどね。

2週間程で杖と契約出来た。
にしてもこの契約は面倒だった。
この2週間杖を手放しちゃいけないらしいので食事やトイレ、風呂、睡眠中でも必ず触ってるか身に付けなきゃいけなかった。
ハリーポッターみたいに一発で決まれば良いのに。

契約が出来た頃、俺の魔法指導員も来た。
「初めましてハンス様。
今日からハンス様の魔法を指導するマイヤーです。
ちなみに系統は風のラインです」
マイヤーは下級貴族でルドルフ家に仕えてるメイジらしい。
ここでもお兄様との差が出たな。
兄貴の指導メイジは火のトライアングルだったらしい。
まぁそいつは今も兄貴の指導員らしいので俺は別のようだ。
普通ならこの露骨な差別に憤慨するだろうが俺は歓喜した。
何故なら風のメイジは初めて見たからだ。
ウチの家系は土や火が中心だから風系統の魔法を見る機会が無かった。
これで風もコピー出来る。
「ラインという事はもう1系統使える筈だな？」
「はい、私は風と水のラインです」
最高だ。
まるで誰かから思し召しされたかのような好都合。
でもこれ逆に考えればヒデェよな？
だってさっきも言ったがウチの家系は火と土。
つまり風と水は遠いから覚えにくい系統だ。
もしかしてこれも嫌がらせか？

まぁ良いや。
俺は系統どころか多分エルフの精霊魔法も使えるだろうし。

「では先ずはお前の腕前を見せて貰えるかな？
教えを請う前に教師の実力が知りたいのでな」
俺がそう言うとマイヤーは少し不服そうな顔をするが、雇主の息子だからか顔を戻し
「かしこまりました。
何をお見せしましょう？」
リクエストを聞いてきた。
「では先ずは基本から一通り見せてくれ」
そう言われたのでマイヤーは風の基本のウィンド（風）、ストーム（竜巻）、フライ（飛行）を見せた。
勿論コピー出来た。
「よし、では次に水系統の基本だ」
マイヤーは言われた通りに水系統の基本であるコンデンセイション（凝縮）、ヒーリング（癒し）、ウォーターシールドを見せた。
「よし、次は応用技や自分が自身がある魔法を見せてくれ。
これで終わりだ」
マイヤーは生徒に舐められないようにするためかウィンド・ブレイク、エア・ハンマー、エア・ニードル、エア・カッター等の風の攻撃魔法で周りの木々にぶつけてなぎ倒すのを見せつけた。
大人気ないねぇ。
まぁこっちとしては攻撃力が高い魔法やフライやヒーリングみたいな便利な魔法をコピー出来たから別に良いけど。
「分かったありがとう。
どうやら君は素晴らしいメイジのようだ。
これから指導をよろしく頼む」
俺の合格判定にホッとしたのかマイヤーは「ありがとうございます」と言う。

俺に不採用を叩きつけられたらかなりの屈辱だし、収入源の一つ失うことになるからな。
これで俺への教師代が入る事になるから少し嬉しそう。

先ずは俺が何の系統が調べた結果、土系統だと判明。
やっぱりこの教師はあんまり役には立たないと分かった。
まぁ良いや。
コイツの魔法は見せてもらったからもう用無しだし。
とりあえず土系統と分かったから練金をしても問題無い事が分かった。
どこぞのオリ主みたいにいきなりゴールドなんか練金せず、精々が青銅か不純物だらけの鉄ぐらいだ。
と言っても今すぐ青銅なんか練金すれば才能ありと見られるからしばらくは自分自身の魔法の才能で頑張る。
自分の実力を上げるのも悪くないしな。

しかし現実は厳しいものだった。
どうやら俺には魔法の才能はほとんど無いらしい。
系統魔法どころかコモンスペルでさえ中々出来なく、レビテーションを成功させるだけで3日もかかった。
これに両親は更に俺に失望した。
元々期待してなかったが、もしかして才能があるのでは？　とほんの少しだけ期待してたらしい。
しかし現実は才能があるとは言い難い。
自慢の長男はコモンスペルを直ぐに会得して系統魔法に磨きをかけていたというのに、次男は未だにコモンスペルさえ覚束ない。

これで俺の評価は一気に地に落ちた。
今までは微妙に監視されていたが、もう監視の目は無くなった。
監視する価値が無くなったから止めたんだろう。
よし、これで鬱陶しい監視が終わった。
あれがあるから今までは演技しっぱなしだったからな。

とりあえず魔法の才能は絶望的と分かった。
残念だが別に問題は無い。
だって普通に魔法を使えば魔力を消費して疲労するが、コピーなら何回使おうが全く疲労しない。
だから問題無い。
魔法はこれからも練習するがそこまで真剣にはやらない。
精々が暇つぶしや演技のためだ。

4　行動開始

更に3年が経ち、8歳となった。

相変わらず俺の地位は低い。
3年前の才能が無い事が発覚した事によりますます俺の存在は空気化した。
以前ならたまに話しかけられる事もあったが、今ではほぼ無い。
両親の関心は長男の事だけ。
偉大なるお兄様はヴィンドボナ魔法学院に入学し、才能をいかんなく発揮しているらしい。
それに魔法ランクがそろそろトライアングルにも昇格しそうというのでますます両親は入れ込んでいる。
きっと卒業したら国の要職に就くか家を継ぐのだろう。
まぁでも家を継ぐのは流石にまだだろう。
親父はまだ身を引くには若い。
それに権力が大好きな親父が簡単に譲るとは思えない。
しばらくは居座る筈。

おかげで俺の事には全く無関心だからこれを利用しない手は無い。
ようやく馬に乗れる身長になったから乗馬訓練をしている。
この世界では移動手段は馬か竜しかない。
残念ながら竜を所有するのは公爵クラスだから子爵ごときのルドルフ家には無い。
幸いにも前の世界で乗馬を体験してたからこの世界で乗馬のコツを

会得するのは結構簡単だった。

乗馬技術を会得したことから多少の遠乗りを始めた。
ほとんど見向きもされないが、一応子爵家の次男なので何人か護衛や使用人を引き連れて領内を回る事にした。
ルドルフ領は正に中世ヨーロッパな感じだった。
民はボロボロな家に住み農業をしている。
しかし働いても働いても稼ぎのほとんどを税金に取られて悲惨な生活を送っている。
繁華街も店はそんなに多くないし、道は石畳で整備はされているが清掃という概念は無いのかゴミや汚物が転がっている。
改めて見るとヒデェな。
まぁ所詮子爵家だからこの程度の経済力しか持ってないか。
領自体はそこそこデカイのだが、未開の地が多いし、オーク鬼や怪物が群生してるから開拓は進んでない。
だから人が住めるエリアは小さい。
これでは人口が上がる筈は無い。

いかにもな家だな。
これならあの優秀なお兄様に期待するのもおかしくない。
あのお兄様が国の要職に就くか、トライアングルになって帰ってくれば開拓も進むだろうから望みをかけているんだろう。
だから相対的に俺の価値が下がる。
ヴァリエール家みたいな大貴族でなきゃルイズみたいな役立たずを愛する事は無かった筈だ。
あれは余裕があって初めてなる。
ルドルフ家みたいな弱小貴族は役立たずを愛する余裕など無い。

　それについてはもう良い。
いかに自分の家が弱小かは分かったが、別に何をする気も無いからスルーだ。
俺が諫言した所で無視されるのがオチだから無意味だ。
それよりも重要なのは俺の自由度が大幅に上がった事だ。
今までは家から離れられなかったから動けなかったが、今は家から出て遠乗りも出来るようになった。
実験として何日か外泊して帰ってみたが、何らお咎め無かった。
どうやら本格的にどうでも良いらしい。
よし、計画通りだ。
能力のある子供と思われれば気軽な外泊など出来ない。
だから無能な子供を演じたのだ。
これからすることは下手したら1ヶ月以上帰れない可能性があるからこうする必要があった。
何せこれさえ成功すれば一気に動ける。
失敗すれば他の方法もあるのだがあんまり頭良い方法じゃないし、持続しないから次善策はあんまり使いたくない。

　先ずは面倒な護衛やお目付け役の篭絡だ。
魔法指導員のマイヤーも連れて遠乗りをした。
名目は実戦を経験させる事によって才能が開花するかも知れない。
実際はコイツも取り込むためだ。

オーク鬼討伐のためにかなり遠く出て、キャンプを張った。
そして食事時に俺特製のワインだと振る舞った。
護衛や使用人、マイヤーはそのワインを「こんな美味いワインは飲んだこと無い」と喜んで大量に飲んでいた。
そのワインの中には麻薬が含まれている事も知らずに。
麻薬は練金を使って簡単に出来た。

原子配列を操作出来るんだから麻薬の化学式や製造法等を全て知っている俺には簡単に作れた。
オマケに原子配列を弄るだけで作るから純度１００％の超極上品がいとも容易く出来た。
にしても他のオリ主はどうやって金やチタン、ステンレス、火薬、ガソリン等の化学式を知ったんだろう？
俺みたいに特殊な環境下に生きてきたんならまだしも、普通の学生や一般人が知ったとしても覚えていられる筈は無い。
そんなもの日常生活に何の役にも立たないからな。
オリ主達は皆理系の大学や大学院卒業者なら分かるがな。
少なくとも高校生が知ってる訳は無い。

　このように度々実戦経験を積むためという名目で麻薬入りワインをガブガブ飲んだ結果、全員見事なジャンキーとなった。
今では俺の命令には絶対服従だ。
麻薬がもたらす快感の前では全てが無意味だ。
全員をジャンキーに仕立てた後に本当の実戦を始めた。
コピー能力を知られるのは不味いから一応杖を構え、呪文を詠唱しながらコピーでファイヤーボール×１０などとんでもない威力の魔法をオーク鬼に放つ。
そのとんでもない威力のせいで３０匹以上いたオーク鬼は一気に吹っ飛ぶ。
その光景を見ていた護衛達は唖然。
今まで才能などないと思っていたガキがスクエア以上の魔法をかましたんだから唖然としてもおかしくない。

オーク鬼が全滅した事を確認した俺は護衛達に振り返り
「いいか、今見た光景は誰にも喋るな。
もし誰かに喋ったのなら喋った奴は勿論、聞いた奴や喋った奴の家

族も皆殺しにする」
俺の言葉に護衛達は青ざめる。
何せあんなとんでもない力を持った奴に殺すと言われたんだ。
戦っても勝てる筈ないし、誰かを味方につけても敵う訳が無い。
「念のために言っとくがこの事を知ってるのはお前等だけだ。
だからもし漏れたりしたら例えお前等が何にも関係無くても俺はお前等が漏らしたと思う。
そうなったらお前等は勿論、お前等の家族や親戚も皆殺しにする。
…分かったか？」
「「「「はいっ、分かりました！！！！！」」」」
全員何故か敬礼しながら答えた。
これで駒の完成だ。
もしも喋れば自分や家族、親戚さえも皆殺しにされてしまうというムチと、麻薬の甘美なアメ。
これでまず裏切る事は無い。
何せ裏切れば家族諸とも殺されるし、万が一助かったとしてももう麻薬のとんでもない快感を得られなくなる。
リスクの割にはリターンが少なすぎる。
だったらここは従い、アメを貰えるように頑張るのが人間だ。

5　最強兵器

あれからしばらくはコピーした能力の経験を得るために遠乗りしてオーク鬼や怪物を狩っていた。

2ヶ月後、とうとう実行に移す。
一応執事に
「しばらく狩りに出る。
もしかしたら1ヶ月くらい帰らないかも知れないと父上に伝えておいてくれ」
と伝言を残す。
8歳の子供の1ヶ月以上の外泊に執事は「かしこまりました。旦那様にお伝えしておきます」と返した。
普通いくら護衛がいるからって1ヶ月以上の遠出なんか許さないと思うがな。
許すにしても何を狩りにいくのか？　どこまで行くのか？　ぐらいは聞くべきだが俺の扱いはこんなもんだ。
何せ両親は俺に価値を見出だせてないからどうでも良いし、それどころか狩りに行くなら少なくとも領内の怪物が多少なりとも減るのだからと推奨さえされた。
とんでもないネグレクトだが俺には好都合だから別に反論しない。

俺は秘密を知る者全員、つまり何時も通りのメンバーを引き連れて出発した。
これまではどんなに遠くてもゲルマニア領内だったが、今回は国境を越え、トリステインに侵入した。
目的地はラグドリアン湖。

にしても簡単に国境越えられたな。
国境ラインに壁や標識がある訳じゃないからイマイチ国境を超えた実感は無いが、地図を見る限りここはトリステインらしいので国境を超えたのだろう。
国境を超えた俺達は一路ラグドリアン湖を目指す。

何故ラグドリアン湖を目指すのかと言えば、水の精霊が所有する秘宝、アンドバリの指輪を手に入れるためだ。
あの指輪はマジで欲しい。
何せあれさえあればどんな奴でもたちどころに服従するし、不死の兵隊も作れる。
流石にバレるとヤバイから軍隊は築かないが、ある程度は欲しい。
アンドバリの指輪を使った兵士なら絶対逆らう事は無いし、ディスペルを食らわなければほとんど死ぬことは無いから肉壁には持ってこいだ。
是非不死の兵士で固めた親衛隊が欲しい。
それならある程度安心出来る。
だから何よりも一番アンドバリの指輪が欲しい。
ていうかあれ以上のチートアイテムってあるか？
ティファニアが持ってる指輪も十分凄いがただの治癒を強くしただけだし、虚無シリーズは虚無以外では無意味。
場違いの工芸品は確かに凄いし便利だけどいつかは作れる。
アンドバリの指輪はティファニアの指輪みたいに使うと減るのか分からないが、俺の能力があるから問題無い。

しかし面倒なのもある。
アンドバリの指輪の持ち主の水の精霊だ。
アイツに触れると精神がイカれるらしいから触れないし、だからと言って対話するにしても別に盟約を結んでいる家系な訳では無いから話すらしてくれないだろう。

だからここは強行策しかない。
クロムウェル達みたいに。

ラグドリアン湖に近付いたら周囲に誰もいない事を確認してから俺は勿論、護衛達にも仮面とフード付のマントを深く被らせて顔や体を覆った。
これはもし誰かに見られたとしてもバレないようにするためと、水の精霊に顔を覚えられないようにするためだ。
水の精霊に人間の顔の判別が可能かは分からないが、もし顔を見られてその顔を水でコピーされでもしたら面倒だからな。
それと念のために護衛達にこれから先は絶対俺の名前を出すなと厳命した。
クロムウェルは姿を隠す事は出来たが名前を聞かれた事によりバレた。
俺はそんなヘマはしない。
もし俺の名前を呼んだ者は必ず殺すと言っておいたから呼ぶことは無いだろう。

ラグドリアン湖の前に来たら護衛達は待機させ、俺は下馬して湖の前に立つ。
これからは俺一人でやる。
護衛達を連れていって万が一にも水に触れられでもしたら一気にご破算だ。
どうなのかは分からないが水に触れたら記憶さえも読まれかねない。
だから確実性を上げるために一人で行く。
水の精霊に触れずに湖の底にあるアンドバリの指輪を手に入れるには最低でも二人のメイジが必要だ。
先ずは風のメイジが自分達の周囲に風を張って水の侵入を防ぎ、火のメイジが水を蒸発させて進んだり攻撃を防ぐ。

オマケにこの二人のメイジは最低でもトライアングルクラスじゃなきゃ無理だ。
何せずっと風の壁を展開させつつ、火で進路を確保する。
少なくともドットやラインクラスではそんな高度な操作は無理だから高レベルが要求される。
しかし俺は一人で良い。
何せ一人で全ての系統を同時に使えるし、魔力は減らないから疲れる事も無い。
むしろ他にも誰かがいればそいつの事も気を付けなくてはいけないから足手まといにしかならない。

さあてやるか。
先ずは体の周囲を風の壁で覆い、火を使いながら水を蒸発させて進路を確保する。
そして水面から徐々に底を目指して進む。
途中水の精霊の攻撃と思わしき水のムチが来るが、風の壁に阻まれる。
正面の水流がいきなり乱れ、壁を破壊しようと水流弾を放つが火で蒸発させる。
他にも色々な攻撃が来たが全てかわし、遂に湖の底に到達した。
底には指輪が転がっていたのでその指輪を見て、そして拾い上げた。
その瞬間、水の精霊は指輪を盗まれると思ったのか攻撃の手を強める。
しかしそれも全て壁に阻まれて終わる。
俺は指輪を少し見た後、指輪を元あった場所に置き、浮上を始めた。
すると水の精霊からの攻撃が止んだ。
何せわざわざ自分の攻撃を掻い潜っておきながらただ指輪を見て触っただけだからな。
何がしたいのか理解出来ないんだろう。
普通なら盗むだろうが、俺は見て触るだけで十分だ。

わざわざ厄介な水の精霊を敵に回す理由は無いしな。
湖から上がり、心配そうに見ていた護衛達に引き上げの指示を出し、馬に乗った時、声をかけられた。
「待て、単なる者よ」
声がしたほうを見ると誰だか分からないが中年男性の姿になった水の精霊がいた。
「お前は何をしに来たのだ？
アンドバリの指輪を盗むのかと思えばただ触って見ただけ。
何が目的だったのだ？」
「…別に、ただ指輪を見て触りたかっただけだ。
お前にとってはどうでも良いことではないか？」
俺の返答に水の精霊は体を変形させながら考え
「……そうだな。
指輪を取られた訳では無いし、我にはどうでも良いな」
そう言った後に体が崩れ、水に戻った。
それを見届けてから改めて撤収命令を出し、ラグドリアン湖を離れた。

しばらく走り、ラグドリアン湖からかなり離れた辺りでキャンプを張った。
護衛達から何しに湖に行ったのか聞かれたが「気にするな」と言って黙らせた。
護衛達は不満そうだったが、今日の褒美としての麻薬入りワインの配給を始めたら全員が笑顔になって並んだ。
やっぱりジャンキーにとってはヤクが貰えるなら何だって良いんだろう。
しかし今回のワインは更に特別製だ。

何時もの麻薬と一緒にアンドバリの指輪の液体も混ぜたワインだ。
それを全員に配給し、乾杯の音頭を取る。
「今回の遠征に付きあってくれて感謝する。
わざわざ国境を越えてまでの旅だったが、全員のおかげで無事目的を達成出来た。
今日は思う存分飲んで楽しめ。
乾杯！」
「「「乾杯！！！」」」
俺は普通のワインを飲むが、護衛達は麻薬とアンドバリの指輪の液体が入ったワインを飲んだ。
護衛達は飲んだ瞬間はヤクが体を回ったからかテンションを上げたが、徐々にテンションは下がり、そして目から意志が消えた。
これで不死の親衛隊の完成だ。
今までは麻薬で縛っていたがそれでは不安だからアンドバリの指輪を使って完璧な忠誠を手に入れた。
やはり能力を完全に知られた訳では無いが一端を見られたのは不安だったからな。
「全員に命ずる。
今日見たことは勿論、俺が力を隠している事は一切誰にも話すな」
「「「はい、かしこまりました」」」
全員が意思の無い目で応じる。
これで大丈夫だ。
燃やされれば死ぬがディスペルを食らわなければ元に戻らない。
後は念のためにコイツらの家族には死んで貰おう。
あんまり指輪を使いすぎるとおかしい人間が増えまくるからな。
指輪は必要最低限だけ使う。
何でもそうだがやり過ぎると身を滅ぼす事になる。
どこかで線引きが必要なのだ。

6　支配と革新

ラグドリアン湖から帰った俺は早速行動を開始した。

にしても何にも心配されて無かったな。
2週間も外泊して帰って来ても執事は何時も通り出迎えるし、「何か問題は無かったか？」と聞いたが「何もございませんでした」と返すだけ。
一応親父に帰還報告をしたが「分かった」と言われただけ。
マジでコイツら俺の事どうでも良いんだな。
まぁ良い。
それも今日で終わりだからな。

執事や使用人達に指輪の水を飲ませて支配した後、食事の時に指輪の液体を混ぜたワインを俺以外に出す事を指示した。
そして食事の時間が来て全員席に着いた。
全く価値を見出だされてはいないが、一応俺も食事の席に座る。
全く会話に関われないが体面があるんだろう。
食事が始まり、次々メニューが並ぶ。
そして執事が指示した通りに両親には薬入りのワインを注ぎ、俺には普通のワインを注ぐ。
各々のタイミングで両親はワインを飲んだ。
その瞬間、ワインを飲んだ両親の目は虚ろになり意志が失った。
両親のいきなりの変わりようにも使用人達は何も動かない。
何故なら俺以外の全員の目には意志が無いからだ。
そしてそのまま俺は食事を続ける。
両親も俺から何も指示が無いからそのまま食事を続けた。

デザートも食べ、食事が終わったので指示を出す。
「これからは俺の指示に従ってもらう。
いいな？」
「「はっ、かしこまりました」」
両親共に俺に礼をする。
今までなら信じられない光景だな。
何せ俺は命令されるだけで命令するなんてあり得なかったからな。
さて、これからがいよいよスタートだ。
「先ずは長男のジャコモを呼び寄せろ。
緊急的な用件があるとでも言えば来るだろう」
「はっ、かしこまりました。
ジャコモを呼び出します」
親父は食堂から出て執務室に向かった。
学院に向けた手紙を書きに行くんだろう。

３週間後、ジャコモがウィンドボナから帰ってきた。
「一体何があったのですか父上？
手紙には緊急的な用件としか書いてませんでしたが」
「まぁそう慌てるな。
とりあえず先ずは食事にしよう話はそれからだ」
親父が兄貴を食堂に連れてきた。
食堂は既に準備が完了されていて母親と俺も着席してる。
「母上、ただいま帰還しました」
「お帰りなさい。変わりありませんか？　ジャコモ」
「はい」
兄貴は母親の手にキスをする。

俺には一瞥をくれるだけで何も話しかけない。
何時も通りの光景だ。
これまではな。
先ずは食前酒での乾杯から始まった。
親父が乾杯を告げ、全員が食前酒を飲む。
その瞬間、ジャコモの目からも意志が失われた。
「ジャコモ、お前もこれからは俺の指揮下に入ってもらう」
「はっ、かしこまりました」
あの尊厳が高すぎる兄貴が頭を下げる。
これでルドルフ家を支配し終わった。
出来るなら兄貴は学院卒業後に支配したかったが、どうせ休暇になったら帰ってくるのだから早目に終わらせとく。
このまま学院に戻すと違和感から疑われそうだが、卒業させないと色々面倒だし、後々の事を考えて戻す事にした。
ジャコモには学院では以前のように振る舞えと命じたから少しは誤魔化せるだろう。

ジャコモが学院に帰った後、領地改造を開始した。
先ずは官僚達や税務官等を招集し、指輪を使って支配した後に経済学や会計学、経営学等を叩き込んだ。
出来るなら指輪はあんまり使いたくないのだが、初めが肝心だし、8歳のガキの話を真面目に聞くとは思えないから使った。
今までの世界同様、始めにちゃんと教育さえ出来れば後は俺が表に立たなくてもどうにでもなる。
こいつらに基礎を学ばせ、いかに今までの経営が異常だったかを教え、どうすべきかをテキストを渡して教え込む。
普通に教えたら貴族や平民がどうとか言うが、支配された奴等は文句など言う筈は無いから黙って従う。

官僚達に基礎を仕込んだ後、税改正を宣言。
今までの搾取としか言いようが無い税率を大幅に下げ、生活に困らない額にした。
そしてインフラ整備や土地の開拓として大量の公共事業を開始。
これによって今まで税によって食うだけで精一杯だった生活は改善され、公共事業によって失業者が激減。

更に資金集めや生活向上として何時も通りホンゴウ商会を開いた。
ホンゴウという名前はハルケギニアには珍しいがこの方が目立つからこれで良いか。
という事で決まった。
最初はルドルフ商会にしようと思ったが、それでは国営企業になり競争力がつかないし、色々面倒だから民間企業として起業。
ホンゴウ商会は豊富な商品と安い価格なため瞬く間に人気となった。
何せ今までは収入のほとんどは税金に取られて買い物なんか考えられなかったが、税改正のため余裕が生まれた平民達は買い物を楽しむ。
ホンゴウ商会は既存の商会を買収し、更に巨大化していく。
それに比例して雇用が増えていき、ますます平民は豊かになっていった。
ちなみにホンゴウ商会は同じグループ内での競争を推奨しているから部門によって3～5ぐらいに分かれて売上を競ってる。
これは競争原理によって市場が停滞しないようにするためだ。

識字率向上のために義務教育制度を開始。
全領民は最低2年間の義務教育として読み書き、簡単な計算を学ば

せ、ルドルフ家への洗脳教育を施す。
それと同時に官僚育成のためにルドルフ大学を建設。
試験は非常に厳しいが学費等を無料にし、貴賤は問わないとした。
そのおかげで教養はあるが金は無い貧乏貴族や、平民に落ちてしまった元貴族等がチャンスを掴むためにこぞって受験した。

更に戦力増強のために仕官達を呼び出して官僚同様に支配して近代戦闘や軍規を叩き込む。
そして仕官学校と兵学校を建設。
仕官学校では将としての指揮官教育し、兵学校では軍規や兵士としての基礎を学ぶ。
軍に入れば福利厚生がキチンとしてるし、税でも優遇される。

ここまで大改革を急激にすれば帝都から怪しまれるが、忠誠心は変わってない証として儲けた分だけ税金を払い、同時に献金もする。
ここがトリステインだったらこれでも何か言ってきそうだが、ゲルマニアはそこまで貴族や平民がどうとか言わないし、ちゃんと税も払ってるし献金も始めたから特に文句は言ってこなかった。
そこまで忠誠心を求めてる国でもないしな。
ちなみにロマリアから変な探りを入れられないようにルドルフ領にいるロマリア神父達に指輪の液体を飲ませて支配した後、大量の寄付をする。
ロマリアは寄付さえちゃんとすれば文句は言わない。
別にブリミル教を否定してる訳じゃ無いし、教会の改修や新設にも金を出している。
だからルドルフ領にいる神父や司祭達がロマリア本国に何も報告しなければ問題は無い。

技術面での進歩を進めた。
研究施設を建設して元研究員や知識や技術レベルが高い奴等を集め、またもや指輪で支配した。
研究内容が外部に流出するとヤバイからな。
だから絶対逆らわないように支配下に置く。
そして研究者達に物理化学の基礎や機械工学を教える。
指輪の支配下にあっても知能が上がる訳ではないから理解に時間はかかるが、確実に理解していっているから良しとする。
この世界では練金すれば簡単に原料を得られるから結構簡単だ。
それにゲルマニアは冶金技術がハルケギニアでも抜きん出ているから技術レベルも問題無い。
と言っても現代とは比べるのもおこがましい程の差があるから微妙だが、初期段階としては悪くない。
工作機械等の設計図や使い方の資料は全部持っている。
前の世界でもしもまた違う世界に行った時のためにと色んな分野の資料をコピーしたからな。
最初は手工業でやるしかないが、１０年も経てばそれなりの工作機械も出来るだろうから一気に機械工業に変わるだろう。

先ずは蒸気機関の開発だ。
いきなり現代みたいにコンピュータ管制とか無理だし。
ゲルマニアの技術レベルならそんなに時間はかからないだろう。
原作でコルベールが初期の蒸気機関を作ってたし。
にしても他のオリ主はどうやってあんなに急激に技術レベルを発展させてるんだろう？
この精々産業革命以前のレベルでしかない世界で練金が出来るからって第二次大戦レベルの兵器を僅か数年で量産するなんてそれこそ魔法だ。
どうやってんだ？

治安向上のために警察機構を設立。
更に交番制も開始した。
やっぱり各地に交番があると治安は上がりやすい。
治安が悪い領ではロクな経済活動出来ないからな。
ちなみに賊対策のために演習として軍に頻繁に襲撃をかけさせている。
どんなに強くても所詮は賊。
軍に勝てる筈は無い。

情報入手やスパイ狩りのために諜報組織、ゲーレン機関を設立。
前の世界で得たスパイ技術や暗殺術を教える。
勿論コイツらも指輪で支配済みだ。
コイツらが捕まって拷問されようが情報を吐く事は無いが、万が一ディスペルみたいな魔法があるかも知れないから、捕まるか捕まりそうになったら爆死しろと手榴弾を持たせている。
死体が残ってると調べられて万が一にもアンドバリの指輪がバレる危険性があるからな。
指輪で支配した奴等は恐怖を感じないから自殺も躊躇わない。
正に理想的なスパイだ。

まだ蒸気機関も出来てないからそんなに高度な兵器の量産は出来ないが、今でも出来る新兵器開発を始めた。
先ずはマスケット銃にライフリングを刻んでゲベール銃に改造する。

この世界の銃はフリントロック式と火縄式の銃しかない。
だから一発一発を撃つのに時間がかかるしあんまり射程距離や命中制度が高くないから脇役になりがちだが、ライフリングを削るだけでもかなり飛距離は伸びるし、精度も上がる。
それに前装式から後装式にし、今までの丸い弾からドングリ状にしたミニエー弾を作るくらいなら出来る。
更に無煙火薬も練金してコピーすれば無限に作れるから紙薬莢も作ろう。
こうすれば完全にミニエー銃の完成だ。
ミニエー銃なら今までの比じゃない程に短い間隔で撃てるし、命中精度、距離も比較にならない。
まだ金属薬莢は作れないが紙薬莢なら作れる。
早く戦えるようにならなくては。
少なくとも原作突入前に決めないと勝ち目は無い。

何か懐かしいな…。
前の世界でも初めの頃はこんな感じで毎日必死でやってたな。
日本統一してからは楽だったけど、九州統一前は余裕なんか無かったから何でもがむしゃらに頑張ってたな…。
……何か年寄りみたいに昔話をしてしまった。
まぁ、見た目は８歳だけど精神年齢は５００歳越えてるから仕方ないか。

7　発展

行動開始から2年。
俺は１０歳となった。

様々な献金の結果、親父のボリス・フォン・ルドルフは子爵から献金で買える最大の侯爵に昇格。
更にたまたま空いてた周辺の領地や空いていた領地を買い上げ、領地は一気に１０倍以上に膨れ上がった。
何故か前年に周囲の貴族達が事故にあったり自殺する等して空きが出たので、空白地帯をルドルフ家が全て大金で買ったのだ。
それによって爵位は侯爵だが、領地の広さは公爵に匹敵する。
一気にゲルマニアでの上位貴族に浮上した。

正にタイムリー。
周囲の貴族達はルドルフ家のいきなりの方向転換や急発展を疑問に思い、スパイを潜入させていた。
しかしそれがゲーレン機関によって発覚。
スパイは殺され、指輪の力で蘇らせた後に全て話させた。
そして支配したスパイを雇主達の元に返して調査報告と言って油断させた雇主を殺させ、家族もまとめて殺した。
死体は事故や無理心中したように見せかけた。
ちなみに仕事を果たしたスパイ達はもういらないから焼き殺して畑の肥料にした。
科学捜査なんて概念は無いハルケギニアでは急な無理心中という不可思議な出来事があったのにロクに調べず、領地経営が行き詰まったせいで無理心中と断定。
領地は一時期皇室領に編入されたが、ルドルフ家が大金で買い取る

と申し出たので売り払った。
どこにも不備は無い。

最初は侯爵じゃなくて伯爵あたりにしようかと思ったが、どうせ急激に昇格したら怪しまれるんだから一気に最上位の侯爵にした。
これで伯爵以下の奴等は手を出しにくくなった。
戦争で活躍したんじゃなくて商売で成り上がったんだから舐められる恐れがあるが、攻め込んでくるのなら分からせれば良い。

それにしてもゲルマニアはやりやすい。
トリステインだったら献金を大量にしても金だけ取られて終わりだろうし、アルビオンだったら土地自体が無いからどうしようも無い。
ガリアなら多少は融通されるだろうが何の戦果も無しにいきなり侯爵にはなれない。
伯爵が精一杯だろう。
一方、ゲルマニアは金さえ払えば大抵の物は手に入るし、土地は逆に広すぎて余ってるから簡単に買える。
ロクに開拓されてないのが珠に傷だが仕方ない。
逆に開拓されている土地なら皇室領のままだっただろうし。
自分達の好きに出来るのだと思えば悪くない。
この世界は完全に地方分権制度だから一々中央にお伺いを立てる事は少ない。
言わばここはルドルフ王国なのだ。
勝手に法律を作れるし、勝手に税率も決めて良い。
領地内なら立法、司法、行政は思うがまま。
確かにこんなにも権力があるのなら貴族が腐敗もするな。

新たに領地と一緒に領民を大量に獲得したんだから一人一人が分かるように戸籍制度を確立し、国民背番号制も実施。
この世界なら家畜のように人間を番号付きにしても誰も文句は言わない。
平民は家畜と同じなのだから。
むしろこれのせいで税金や年金記録等が全て分かるようになるなら便利で良いと好意的に受け取る平民がほとんどだ。

不法侵入を防ぐために国境線も正確に引き、等間隔で監視施設も建設。
領地が広くなったせいでトリステインと国境を接するようになったから守らなくてはならない。
トリステイン間の国境線には鉄条網や二重の金網、塹壕等を設けて侵入を防ぐ。
他の領地では国境が曖昧で簡単に国境を越えられるが、俺の領は許さない。

新たに手に入れた領地の開拓のために開拓部隊を派遣した。
開拓部隊には怪物と戦うために最新兵器も多数所持しているし、直ぐに開拓出来るように作業兵も随行している。
人口や生産力を上げるために土地は幾らでも必要になる。

蒸気機関が完成した。
やはりこの世界では詳細な設計図やノウハウが載ってる資料があれば簡単に作れるらしい。

伊達に６０００年も魔法文明でやっていた訳では無いようだ。
大抵の部品は練金で作れるし、固定化なんていうチートがあるから部品の摩耗も少ない。
始めさえ苦労するが、基礎さえ理解させれば後は簡単だった。
新技術を手に入れるというのに支配した技術者でも興奮したのか、睡眠や食事を必要としない体をフルに使って短期間に蒸気機関を完成させたのだった。

一気に実用可能な蒸気機関を開発した事で蒸気機関車も完成したが、公には使えない。
前の世界同様、バレればその性能から他国や皇室も欲しがるし、一気に警戒されて攻められる可能性が高いから公表は出来ない。
しかし新たに開拓地を広めるには膨大な輸送力を持つ機関車は必要不可欠だから、ひっそりと使う事にする。
州都とも言うべきか、ルドルフ領で最も栄えている場所では旧来通り馬車か、レールを引いて移動を楽にした駅馬車を使う。
これなら例え秘匿地域で機関車用レールを見られても誤魔化せる。
秘匿地域は領の軍事機密のため見せられないとでも言えば何とでもなる。
わざわざ皇帝が直に来ない限りは。
まぁ来たら来たで適当に陣地とかを見せて誤魔化せば良いしな。
領地がとんでもなく広大になったから幾らでも誤魔化せる。
地球なら十分１国に値する広さだ。

広がった領地にキチンとした道路を整備し、石畳で舗装したり、上下水道を整備したりするなどまた新たな大規模公共事業が生まれた。
更に新領地にホンゴウ商会も出店して市場を支配する。

ルドルフ領に編入した事により税率は定められ、それが以前より低い額なら平民達は新たな支配者に文句等無い。
低い税やホンゴウ商会、公共事業によって得た収入でホンゴウ商会製の安くて品質が良い商品を平民が買いたがるのは道理。
今までつける余裕が無かった装飾品や、新たな服、新鮮な果物等が買えるようになれば誰でも欲しくなる。

更に今まで学ぶ事など許されなかったのに、逆に領主からの命令で義務教育を受けられるようになり、読み書きや簡単な計算が出来るようになった。
そのおかげで今まで読む事は出来なかった本も買う。
印刷技術の発展のおかげで大量に印刷出来るようになったので平民の所得で本も買える。
誰がこの領に不満があるだろう？
中には何が気に食わないのか分からないが不満を漏らす平民もいるが、９割以上の平民はルドルフ領になって良かったと言う。
更に領主であるボリス・フォン・ルドルフは領内での貴族の無礼打ちを禁止にしたため、貴族に怯える必要は減った。
まぁあまりに無礼な態度を取れば流石に殺されるが、別に何もしてないならされる事は無い。
貴族が酔っ払って暴れでもしたら警察を呼べば良い。
流石の貴族も警察に捕まれば犯罪者として扱われる。
そうなれば何らかの処罰されるようになるから安心出来る。

このように日に日にルドルフ領の名声は高まり、各地の平民達は希望を求めてルドルフ領への亡命を求めた。
ルドルフ領は基本的に移民に寛容だから亡命してくる者達を受け入れるし、必要なら職も紹介してくれる。前職によって分類され、農民ならそのまま農民に、兵士だったなら兵学校に入れられる。
職業選択の自由はあんまり無いが、平民達は職を持てればどうでも

良いので文句を言う者はいない。
むしろ経験を活かせるのなら喜んで従う。
権利もクソも無い世界なのだから。

食料の大増産のため今までの地主制度は廃止し、土地を買い上げて大規模農業法に変えた。
農業機械や化学肥料を作れるようになったのだし、土地は余ってるのだからアメリカみたいにデカイ農場を作って大量に食料を生産する。
沢山の地主がいると面倒だからな。
デカイ農場を少人数で分けた方が楽だ。

新兵器が続々と完成している。
蒸気機関の完成により金属薬莢の大量生産やライフリング刻みも出来るようになった。
これのおかげでボルトアクション式ライフルが完成。
戦力は大幅アップだ。
更に機関銃も開発した。
これで戦い方が一気に変わった。
今までのような騎馬突撃が無意味になる。
迫撃砲や榴弾砲も完成したからこれで大抵の敵には勝てる。

空海軍も設立した。
空軍、海軍別に作りたかったが、領地に海は無いから別に作る意味が無い。

ちなみに軍は防衛省に所属しており、陸、海空と統合してあるから縄張り争い等は無い。
防衛大学も設立して、入学当初は同じ訓練や学科を受けるが、適正検査をして陸、海空に分ける。
授業は洗脳教育を施すからルドルフ家に絶対の忠誠を誓わせる。
統合参謀本部も作ったから指揮権も一元化出来る。

この世界では軍艦は空を飛ぶ物なのでそれに倣い、軍艦を購入したり新たに建造もした。
燃料の風石はハルケギニアの地下に莫大な風石鉱が存在するからそれを掘削している。
確かこの大風石鉱のせいでハルケギニアはいずれ浮き上がると言われていたよな。
だったらその莫大なエネルギーを使わない手は無い。
現実世界でも莫大な埋蔵量を誇った油田を次々枯らしていっている。
人間の欲望ならどんなに大量にあっても使いきる。
おかげで風石はコピーする必要も無い程に取れる。

燃料を確保したら次は装備だ。
艦体は空海どちらでも使える両用艦で、今まで通りの木造船や、現在開発中の鉄鋼船がある。
木造船でもこの世界では２００～３００ｍ級の木があるからとんでもなく大きい軍艦もある。
しかしやはりとんでもない大きさの木はそんなに無いから少ない。
大抵が１００ｍぐらいだ。（それでも十分デカイが）
そして装備はほとんどがライフリングを削られてにない大砲で球形弾だが、中には榴弾もある。
何で榴弾があるのならライフリングを削らない？
まぁ魔法を使えば榴弾も作れるから考えないのか？
俺の艦隊の大砲は勿論ライフリングを刻まれてるし、砲弾の形も現

代風にしているから射程距離も長いし、精度も高い。
この世界では大砲は２リーグ、つまり２ｋｍ程度しか飛ばない。
しかしルドルフ軍の大砲ならその倍以上飛ぶ。
完全にアウトレンジ攻撃出来る。

しかし、致命的な問題もある。
それは航空戦力。
この世界で言う竜やグリフォン、マンティコアなどだ。
残念ながら我がルドルフ領は竜や飛行生物の数が少ないから航空戦力が乏しい。
風竜や火竜で軍艦を落とすのは難しいが、攻撃を食らいっぱなしになるのはキツイ。
しかしまだ航空機を開発する技術レベルは無い。
ならどうるか？　簡単だ、無いなら他から持ってくれれば良い。

8　戦争準備

なけなしの風竜部隊や親衛隊を引き連れ、俺自身も風竜に乗ってトリステインの国境を越える。

そして更に飛行し、遂に目的地に到着。
タルブ村だ。
村についたら村長に会った。
「私がこのタルブ村の村長です。
貴族様がこのような村にどのようなご用でしょうか？」
「私はゲルマニア貴族、ハンス・フォン・ルドルフだ。
秘宝、竜の羽衣を見に来た。
この村にあると聞いたのだが」
「竜の羽衣…ですか？
確かにこの村にありますが……あれは秘宝なんて物じゃありませんが？」
「秘宝かどうかは私が判断する。
竜の羽衣がある場所に案内せよ」
村長は竜の羽衣は置物程度の認識しかないから不思議がるが、案内しろと命じられれば拒否なんか出来ないから素直に案内する。

案内された所はどこか寺院に見えるような村の物置小屋だった。
「私が竜の羽衣の所有者のタケオ・ササキです。
竜の羽衣をご覧になりたいとお聞きしました」
目の前には黒目黒髪、少し背が低いが何か迫力がある日本人がいた。
成る程、まぁこの時代ならまだ佐々木武雄が生きてても不思議は無いな。
「そうだ、竜の羽衣を見せて貰おう」

俺の命令に少し躊躇っていたが、逆らう事は出来ないから「此方です…。」と案内する。
小屋は結構大きく、小さい格納庫ぐらいはあった。
そして中にはこの世界にあるはずが無い物体が鎮座していた。
零式艦上戦闘機、ゼロ戦５２型だ。
太平洋戦争末期の日本の主力戦闘機。
俺は近付き、触る。
ジュラルミンだ。
間違いなくこの世界には無い物質。
あんまり質は良くないがまぁ良いか。
「……素晴らしい。
流石一時期とは言え、世界最強を誇った機体だ」
俺の言葉を聞き、佐々木が反応した。
「…これが何か分かるのですか？」
佐々木が聞いてきたので俺は護衛達や村長に「二人にしてくれ」と言う。
護衛達は勿論命令に従うし、村長はそれを見て、出ていかなくてはならないと思い出ていく。

全員出ていった。
「さて、これが何か分かるかだったな」
俺が聞くと佐々木は頷く。
「零式艦上戦闘機。零戦。
大日本帝国軍の戦闘機」「っ！！
まさか、貴方も？」
「そうだ、お前は日本人のままこの世界に来たらしいが、私はゲルマニアの貴族として生まれた」
「…そうでしたか。
日本人に会ったのはこれが初めてですね」
「だろうな、私も日本人を見たのはお前が初めてだ。

……お前は零戦と一緒に来たらしいが、という事は大東亜戦争中に来たのか？」
「はい、私は部隊とはぐれ、飛行している内にいつの間にかこのハルケギニアに来てました」
「成る程な。
…この零戦はお前の機体だったな」
「はい、いつか陛下にお返しするために私が預かっています」
やっぱり旧軍人はこう思うんだな。
まぁあの時代は全ての物が天皇陛下の所有物だからな。
「…残念ながらそれは不可能だろう」
「…確かにこの世界を出る術は未だにありませんが、いつか必ず祖国日本に帰るつもりです！」
「いや、そういう訳ではない。
お前は知らないかも知れんが、帝国はアメリカに負けたのだ」
俺の言葉に佐々木は目を見開く。
「……それは……それは誠なのでしょうか？」
「そうだ。
沖縄は占領され、帝都は爆撃によって焦土にされた。
そして１９４５年８月１５日、帝国は無条件降伏を受け入れた」
佐々木は日本降伏を聞き、膝から崩れ落ちた。
正に教科書や映像で見た玉音放送を聞く日本人だな。

「……陛下は…陛下はどうされたのですか…？」
「帝国軍は解体され、一切の軍備を持つ事さえ禁じられたが、それでも国体は守られた。
天皇陛下はその後も日本国の象徴として戦後長らく日本国に君臨されたが、既にお隠れになられた。
今は皇太子様が陛下になられた」
まだこの時代だとギリ死んでないか？
まぁ良いや。

どうせ帰れないんだから。
「帝国は…どうなったのですか？」
「戦後間もなくは厳しい時代だったが、日本は直ぐに復興を始め、瞬く間に発展した。
今では世界第2位の経済大国にまでのしあがった」
それを聞いて佐々木は笑顔になった。
まぁ祖国がそこまで凄くなれば嬉しいのだろう。

「さて、今日私がこのタルブ村に来たのはこの零戦が欲しいからだ。どうだ？　この零戦を私に譲ってはくれないか？
譲ってくれるならお前やお前の家族を我が領に迎え入れる。
…トリステインに我がルドルフ領の噂は伝わっているのか？」
「はい、ゲルマニアのルドルフ領は平民でも希望が持てる領だと噂を聞いてます」
「その通りだ。
我が領では義務教育制度があるから平民でも教育を受けられるし、雇用も豊富にある。
自慢になるが、我が領はこのハルケギニア1裕福な領だと自負している。
どうだろう？
私はこの零戦を量産して空軍を設立する。
その時に、是非お前には航空機の指導員になって欲しい。
勿論給料は弾む」
俺のヘッドハンティングに佐々木は悩んでいる。
まぁ拒否しても指輪で支配するからどうでも良いんだがな。

「最早帝国は無いようですし、このまま零戦を持ち帰っても邪魔になるだけ…。

分かりました。
この佐々木、貴方に着いていきます」
よし、これで指導員もゲットした。
何せ機体だけあっても指導員がいないと面倒だからな。
時間は経っていても戦闘機のパイロットだったんだ。
多分出来るよな？

交渉が纏まったから零戦を持って行く事にした。
そのために風竜部隊を連れてきたんだからな。
佐々木や家族達も持てるだけの荷物を持たせ、一緒にトリステインを脱出した。
流石に何度もタルブ村に訪れればタルブ領主にバレるだろうし。
家具等はルドルフ領で用意するとしてほとんどの荷物は置いていき、必要最低限だけ持って出ていったからみんな軽装だ。
最初はタルブ村を出ていく事に不満気だったが、佐々木が必死に説得したのと、行き先がルドルフ領だと言うので納得したらしい。
ルドルフ領は平民の間では結構有名になっていたらしい。

ルドルフ領に着いた後、佐々木は指輪で支配して、佐々木の家族は皆殺しにした。
佐々木以外は別にいらないしな。
トリステインで支配しなかったのは万が一にも見られたら面倒だったからだ。
ルドルフ領内だったら見られようがどうにでもなるから直ぐにやった。
勿論誰もいない事を確認してからな。
これでシエスタが生まれる事は無くなったな。
まぁ別に良いけど。

サイトに会わなきゃただの平民として終わってたんだ。
いてもいなくとも変わらない。

ゼロ戦を持ってきたので先ずはゼロ戦を大量にコピーした。
そして練金で作ったハイオクガソリンをタンクに入れ、佐々木に飛ばさせた。
失敗したとしても佐々木はもう不死身だし、パラシュートで脱出さえ出来れば死ぬことは無い。
飛行は見事成功。
佐々木は現役時代よりはかなり腕が落ちているらしいが、飛ばせるだけでも十分だ。
今は昔の勘を取り戻させるために毎日訓練させている。
ゼロ戦は幾らでもあるし、部品も固定化を更に何重にもかけたから摩耗しにくい。
整備士を育成するまでは佐々木にやらせるか、機体はインスタントで使うしかない。
何て勿体無い。
戦中の日本からしたら考えられない行為だ。

ゼロ戦という最強航空戦力が手に入ったのだから運用方法も考えなくては。
先ずはパイロットの育成だ。
幸いにもゼロ戦は癖が少ないので練習機には持ってこいだ。
パイロットは絶対機密を漏らさせないために指輪で支配した。
おかげで眠る必要も無いし、食事を取る必要も無い。
更に恐怖も感じないからいきなり大胆な飛行も出来る。
たまに失敗して墜ちるが、脱出さえすれば死なないし怪我もしないから替えの機体に乗って訓練を続ける。

そのせいかみるみる内に練度が上がっていく。
やっぱり恐怖心が無いと人間ってスゲェな。

それと同時に空母の建造も始めた。
いかにゼロ戦の足が長くても長距離移動はキツイ。
だから原作の竜母艦みたいな空母を建造する。
原作では甲板が短くて飛ぶには魔法が必要だったが、この空母はそんな事は無いように飛行甲板を長く設計されている。
それにしてもゼロ戦が艦上機で良かった。
もしも隼や飛燕みたいに陸上機だったら短い滑走路で飛ぶのは難しいし、狭い空母で使いづらかった。
だからマジでラッキーだ。
オマケにゼロ戦は５１型から２０ｍｍ機関砲がドラムマガジン式からベルト給弾式になっていたから装弾数もかなり上がっている。
本当、この機体はベストだ。
まぁ欲を言えばゼロ戦じゃなくてアメリカ軍のＰ－４７とかＦ６Ｆが良かったがな。
ゼロ戦排気タービン過給機積んで無いから高高度戦闘が出来ないんだよなぁ。
まぁこの世界なら４０００ｍも飛べれば十分だから良いか。

とりあえずこれで大丈夫だ。
唯一不安だった航空戦力も手に入れたし。
後は近代兵器で何とでもなる。
でもこのままでは技術レベルが低いままだから内燃機関開発を頑張ろう。
今のままでは装備や兵士を運ぶのは馬車ぐらいだ。
流石に機関車はレールを引かなきゃいけないから素早い移動は出来ないし。

だから牽引出来る車両が必要なのだ。

ここまであからさまに戦力を増強すればそろそろ帝都から何らかのアクションがあるだろう。
そろそろ独立を目指して戦争を行う必要があるから戦力の増強を続けなくてはいけない。
兵士の数は年々増加しているがまだ足りない。
志願制にしているから士気は高いのだが集まるのが遅い。
仕方ないので徴兵制を敷く事にする。
2年間は徴兵制を敷いてとりあえずの戦力を増強させる。
素人でも2年間みっちり鍛えれば多少は使えるようになるだろう。
今までは秘匿していて公には使えなかった近代兵器達を開放し、バンバン訓練させる。
帝都に向けた線路も引き、一気に戦力を集中出来るようにする。
そのために後2年はのらりくらりと帝都からの手をかわすしかない。
あっちが強制的に情報公開を迫ったり、改易命令が下ったら独立宣言すれば良いし、こちらの準備が整ったら宣言して奇襲かけるのも良い。
独立さえしてしまえば後はどうにでもなる。
そのままゲルマニアを滅ぼすのもありだしな。

でも流石にこのまま帝都に向けて戦力を増強すればあからさま過ぎて不味いからトリステインを攻める気のように偽装しよう。
トリステインとの国境付近で演習を度々したり、戦力を集結しているかのように見せつける。
と言っても見せつけるのは旧式兵器のみで機関車のレール等はまだ引かない。

精々が馬や大砲を集めるぐらいだ。
それでも見ようによってはヤル気満々にも見える。
とりあえずしばらくはこれで誤魔化そう。

8．5　それぞれの勘違い（前書き）

まだアブレヒト3世は即位してない設定です。

8．5　それぞれの勘違い

ゲルマニア帝国皇帝フリードリヒは報告書を読んで眉をひそめた。

「ルドルフ領の戦力増強が目につくな…」

フリードリヒの言葉に諜報担当者が答える。

「はい閣下。

ルドルフ領では急に満１８～２５歳の男子に対して徴兵命令を実施しました」

それを聞いてフリードリヒは考え込む。

今が戦時や緊急時ならいきなりの徴兵も理解出来るのだが、今は戦時では無いし、それどころか戦争の気配すら無い平時だ。

そんな時に徴兵しても金の無駄になるだけではなく、経済活動に支障を来してしまう。

ルドルフ領はここ数年経済活動が活発になり、何処から出ているのか分からないがその有り余る経済力を使って子爵から一気に侯爵にまでのしあがった今注目の大貴族だ。

ほんの数年前迄は何処にでもいる貧乏貴族でしかなかったのに、３年程前から急成長している。

ルドルフ家に何があったのだろうか？

「…徴兵理由については何と言っている？」

「はっ。

正式発表では領土が拡大したため、トリステインと国境を接するようになったから国境の守りを強化するためと牽制のためだと。

噂ですと侯爵に昇格したことから力を見せつけるためだとも言われています」

「確かにその理由も納得は出来る。

国境の守りを強大化したくなるのも分かる。
それにいきなり成り上がった事で諸侯に侮られないように分かりやすい軍事力を増強する事も……。
…しかし……」
フリードリヒは納得しない。
一応名目は理解は出来る。
しかし何かしっくりと来ないのだ。
フリードリヒのその姿を見て担当者が自分の意見を言う。
「…戦力を増強し過ぎている……」
「そうだ、確かに国境警備は重要任務だ。
しかしこの平時にそこまでの戦力拡大は必要無い。
むしろあまりに露骨に軍拡すればトリステインはあらぬ疑いを持ってしまい、戦争を招きかねない」
その通り、軍拡はある程度は必要だが、あまりにやり過ぎれば隣国は警戒する。
事実トリステインも国境沿いの警備を厳重にしているし、徐々にだが戦力を増強させている。

「ルドルフはトリステインとの戦争を欲しているのか？」
フリードリヒがその結論に至っても不思議は無い。
何せあからさま過ぎる程に軍拡をしているのだ。
「…確かにその可能性が濃厚ですね。
あそこまで戦力を増強しておいて何も無しでは、如何にルドルフ領が豊かになったとは言え膨大な赤字になるのは目に見えています」
ウム、とフリードリヒも頷く。
確かにトリステインは弱い癖に昔の栄光を引きずってやたら高飛車だし、始祖の血筋を引いていない我が国を見下している。
そんな国を滅ぼしてやりたい気持ちは理解出来る。
それに我が国がその気になればトリステインごときの小国を滅ぼすのは容易い。

しかし現時点でトリステインを占領しても旨味が少ない。
かつては大国で経済も豊かだったが、今では貴族の人口比が高すぎて生産力が乏しく、腐敗が深刻でボロボロ。
まだ国の体制をなしているのもトリステイン王国から独立したクルデンホルフ大公国からの援助や借款で何とかなっているのが原状だ。
オマケにクルデンホルフから金を借りているのは国だけではなく、トリステイン貴族のほとんどもかなりの借金をしている。
こんな国を支配しても逆に膨大な負債を背負うだけだ。
「ならばルドルフには自重するよう忠告しよう。
侯爵になって舞い上がる気持ちも分かるが、何事もやり過ぎてはいかん。と」
「そうですね。
このまま軍拡を続けていてはトリステインとの戦争に発展するかも知れませんし」

それで話は終わった。
命令ではなく、あえて忠告に留めたのはルドルフに強くは言えないからだ。
何せルドルフは毎年莫大な税と莫大な献金も同時にしてくれている。
ルドルフ家からの献金によって帝国の財政も潤っているため、いきなり命令を出せば不興を買い、献金を減らされたり、無くされる可能性もある。
税金の支払いを止めるのなら幾らでも言えるが、献金はあくまで相手からの好意だ。
払わなければならないという義務は無い。
ルドルフ領は毎回莫大な税をちゃんと納めているし、莫大な献金も同時にしてくれているから無下には扱えない。
だから序列こそ公爵よりは低いが、扱いは同等かそれ以上にしてい

る。
公爵に引き上げても良いのだが、特に何の戦功も上げていないルドルフ家をいきなり公爵にすれば他の公爵家からの反発は必至だ。
子爵から侯爵に引き上げる際にも多少の悶着があったのだ。
その時は皇帝命令を出して何とか抑えたのだが、流石にこれ以上は他の貴族達の怒りが爆発する恐れがある。
だから公爵には上げられない代わりにルドルフ家には色々と便宜をはかっているのだ。
「これでルドルフも納得してくれると良いのだが……」
フリードリヒはルドルフが自分の心境を理解してくれるのを祈るしかないのだった。

この時フリードリヒは思いもしなかった。
ルドルフが研いでいる牙が自分に向けられている事を。
その事に気付いた時には既に手遅れだった。

ヴァリエール公爵サイド

ゲルマニアと国境を接するヴァリエール領は現在緊張状態にあった。
その原因はここ数年で勢いに乗り、勢力を拡大させているルドルフ家だった。
ルドルフ家は数年程前迄は聞いたことも無い程に弱小貴族でしかなかった。
階級は子爵で、トリステインから遠く貧しく、大した軍事力を持たない貴族を知らなかったとしても問題は無かった。
何せ自分の領の隣には積年のライバルであるツェルプストー家があるのだ。

ツェルプスト一家とヴァリエール家は長年のライバルでトリスティン・ゲルマニア戦争においては幾度も戦い、負けたり勝ったりしている。

更にはツェルプストーの人間には何度も何度も先祖は恋人を寝取られたりしているので憎しみしか存在しない。

勿論私もツェルプスト一家が、ゲルマニアという国自体が気に食わない。

始祖の血を引いていない癖に国を興して皇帝を名乗り、国を拡大させている。

浅い歴史しか持たない成り上がり者の分際でデカイ顔をしおって。

自分達の格を自覚するべきなのだ。

さて、話が脱線してしまったが、今はルドルフ家の事についてだ。

他国の事なのであまり情報は入ってこんが、噂によれば突然領内で大改革を行い。

税を引き下げたり、商売に精を出したりなど急激に発展をしているらしい。

その稼いだ金を使い、爵位や領地を新たに購入して現在は侯爵にまで上り詰めた。

ここもゲルマニアの気に入らない所だ。

神聖な爵位や領地を金で買うなどまさに野蛮な所業だ。

大体爵位や領地とはいかにその国に長年貢献し、戦争において祖国の存亡を救い、初めて認められるのだ。

それを大金を積んだからと言って簡単に爵位や領地を授けるなど言語道断だ。

だからゲルマニアは何時まで経っても野蛮なのだ。

～～～～～～～～～～～～

（この後ゲルマニアについての悪口を３０分続けた）

とにかく、このルドルフ家は大金を使って爵位や領地を買った結果、今ではゲルマニアでも有数の貴族になり、その領地は広大で我が領とも接するようになった。
つまりツェルプストー家とルドルフ家、この両家から我がヴァリエール家は神聖なるトリステインの国土を守らなくてはいけなくなったのだ。

ツェルプストー家とは長年に渡って睨み合っているのでどう動いてくるのかは分かるのだが、ルドルフ家については前例が無いので全く分からん。
情報によるとルドルフ家は子爵時代は戦争において目立った戦果を上げた事は無く、戦力も弱小に過ぎなかったようだ。
その戦力がたかだか2、3年で大きく変わる事は無いと思うが、急激な発展をしているので侮る訳にはいかない。
それに忌々しいことだがルドルフ家に侵攻するという事はゲルマニアを相手にするということ。
とてつもなく屈辱的なことだが、今のトリステインではゲルマニアには勝てない。
戦力比が開き過ぎている。
だから口惜しいがルドルフ家に簡単には攻められない。
虎の威を借る狐め。

しかし、今現在ルドルフ領に侵攻する可能性が急浮上している。
その発端はルドルフ家が領内において急に徴兵を敷いて戦力を拡大し、国境付近で演習を度々行なっているためだ。
初めは小規模なものだったが、段々と大規模になって今では侵攻練習にも見える。

ゲルマニア側に王宮を経由して苦情を申し出ても「国境警備の強化のため」や「新たに爵位や領土を手に入れて浮かれているだけ」と返してくるだけ。
確かにいきなり侯爵になったせいで他の貴族に侮られないよう戦力を見せつけたいのは理解出来るが、明らかにやり過ぎだ。
あれでは挑発しているようにしか見えん。

しかし、だからと言ってこちらから攻める訳にはいかない。
戦争になれば間違いなくトリステインは負け、ゲルマニアの軍靴によって国土を踏みつけられ、占領されるという憂いを迎えるだろう。
６０００年続いたこの国を終わらせる訳にはいかない。
かろうじてゲルマニア側が攻めてきたのならアルビオンやガリアに参戦を求める事も出来る。
そうなれば僅かだがゲルマニアに勝利出来るかも知れない。
代償として援軍を出してくれた国に何らかを差し出さなくてはならないだろうが、トリステインが無くなるよりは良い。
だからいくら挑発されようと我々からは攻めない。
アンリ陛下からも「絶対バカな真似はするな」と厳命されている。
だから今は屈辱に耐えるだけだ。

なぁに、ゲルマニアだって今トリステインとの戦争は望んでいない筈。
だからいずれはゲルマニアからルドルフ家に自重命令が下ってこの事態も集結するだろう。
そうして見ればルドルフ家も哀れな者だ。
成り上がり者の国の中でも成り上がり者だから周りから侮られないように必死に軍拡したり、威勢の良い行動をしているのだ。
侯爵になったとは言え、心は未だに弱小貴族のまま。

これを滑稽と言わずに何とする？
さぁ、今日も哀れな者の行為に付き合ってやるか。

ヴァリエール公爵も全く思ってもいなかった。
まさか自分は全く相手にされていないとは……。

9　独立宣言

軍備増強から2年、俺は１２歳になった。

何かトリステインのアングル地方のある村で大虐殺があったらしい。
表向きは反政府組織を襲撃した。とか言ってるけどゲーレン機関が調べた結果、ブリミル教を否定して新宗教を作ったからロマリアがトリステインに皆殺しにするよう命令したらしい。
やっぱり宗教って恐いねぇ。
オマケに宗教が堂々と政治に口出しして命令までするんだ。
ブリミル教は滅ぼすか掌握しないとウチもヤバイかも…。
まぁ、色々悪い噂はあるけどウチの領はロマリアに多額の寄付をしてるから今のところ何も言ってこないがな。
どうやら今の教皇はヴィットーリオ程真面目じゃないらしい。
まぁウチには好都合だけど。

軍はこの2年でかなり強力になった。
装備は行き渡るようになったし、兵士達の練度もかなり高い。
陸軍では機械化が進んで榴弾砲やロケット砲、重機関銃、迫撃砲など、第一次世界大戦クラスにまで上がっている。
しかし問題もある。
内燃機関の開発は出来たのだが、まだ実用化の段階に入ってないから輸送手段は機関車か馬車だ。
出来るなら実用化出来てから行動したかったが時間が足りないから今回は無しだ。

空海軍もかなり発展した。
前記した通り内燃機関は出来てないから航空機の生産は出来てないが、零戦をコピーしまくったから必要数に届いている。
パイロットも育成が完了したから問題無い。
何せ訓練で零戦同士で実戦させてるからな。
例えパイロットが直撃食らっても死なないから幾らでも訓練出来た。
おかげで全員がベテランになったからたかだか竜ごときに遅れを取る事は無い。
機銃弾の他に爆弾も開発したから多少の爆撃も出来る。
零戦では精々が５０ｋｇか６０ｋｇぐらいしか搭載出来ないけどこの世界なら威力は申し分ない。

艦隊の方もだいぶ揃った。
以前までは木造船と鉄鋼船の比率は木造船が上だったが、今では完全に逆転した。
舷側にしか大砲が無い戦列艦から、前と後ろに砲塔を備えた戦艦を建造して後はコピーで増やす。
それで何十隻もの大艦隊だって簡単に作れる。戦艦には分厚い装甲も張ってあるからこの世界の砲弾を食らっても何ともない筈だ。
鉄甲弾を食らわない限りは。
艦体は三笠級をベースにしているから砲も３０．５ｃｍや１５．２ｃｍ等を積んでいる。
ちなみに副砲の数を原型より増やしてある。
主砲より副砲の方が出番多いだろうし。

両洋艦は戦艦の他にも輸送船を建造し、重い装備を前線まで輸送する。
空を飛べるから直接前線に行けるから楽で良い。

今ではの世界だったら精々が港まで運んで後は機関車か馬車だからな。
これで輸送力を補える。

大規模徴兵したせいで働き盛の男を大分失ったが、ルドルフ領の発展も順調だ。
インフラ整備は領の主要箇所は完了したし、新たに開拓したおかげで使える土地も増えた。
激増する人口に対して食料増産も上手くいってるから問題無い。

最近スパイが増えた。
急発展と大軍拡の情報を探ろうと国境を越えたり、隣の領から侵入してくるが、国境警備は一番厳重にしてるし、ゲーレン機関も探ってるからスパイ達は次々捕まっている。
逮捕したスパイは全員指輪を使って情報を吐かせた後は皆殺しにしている。
雇主を襲撃させる事も考えたけど、あまりにもスパイが寝返り過ぎると指輪がバレるかも知れないから基本的に全員情報を吐かせたら殺す。
ちなみにスパイを潜入させている所は1位が皇室、2位はゲルマニア貴族、3位はトリステイン、4位はガリア、5位はロマリアだった。
意外にもロマリアが低かったが、ロマリアにかなりの寄付してるし、ルドルフ領のロマリア神父や司祭達から問題ないと伝えられているからそんなには来ていないらしい。
まぁロマリアの関心は自分達に敵意を抱いているか？　異端なこと

はしていないか？　だからそこまでルドルフ領に興味は無いのかな？
かなりの大口寄付者なら多少の事は目を瞑るだろうし。

そろそろ誤魔化すのも限界かな？
未だにトリステイン国境付近で大演習やってるし、最近は首都への侵攻演習も知られたらしいから疑って来ている。
あっちが軍を集結させる前に先手を打つとしよう。

突如ルドルフ領は帝政ゲルマニアからの独立を宣言、同時にドイツ帝国の建国を宣言。
そして同日、帝政ゲルマニアへ宣戦布告した。
宣戦布告理由としては帝政ゲルマニアが侵攻してくる前にこちらから先に攻めるためだった。

侵攻目標は隣にあるツェルプストー辺境伯領とゲルマニア首都のヴィンドボナだ。
2方面作戦は戦力が分散してあまり良くはないのだが、先手必勝の理念から同時に攻める事にした。
何故ならツェルプストー領をほっとくと背後が危険だし、トリステインが火事場泥棒のように侵攻してくるかも知れない。
何せルドルフ領はゲルマニアでかなりの戦力を誇っていた。
そのルドルフ領が独立した事でゲルマニアの軍事力は急低下した。
現代日本で言えば北海道が急に独立したようなものだ。
周辺諸国から見れば垂涎もののチャンスだ。

ヴィンドボナの方は時間が経てば諸侯軍が集結して侵攻が難しくなる。
どんなに雑魚でも群れれば厄介だ。
だから集まる前に中央を叩けば後は各領で散発的に反撃するだけだ。
大体各領の軍事力は多くても３０００～６０００程度。
中には中央を落とせば臣従してくる勢力もあるだろう。
そうなれば後は簡単だ。

ゲルマニアサイド

首都ヴィンドボナは混乱の渦にあった。
何故なら今日、突如ルドルフ領が帝政ゲルマニアから独立を宣言、
そして同時にドイツ帝国の建国と帝政ゲルマニアに対して宣戦布告してきたのだ。
何せ独立されただけでも混乱するのに同時に宣戦布告までされたのだ。
旧ルドルフ領の情報を集めつつ、軍も集結させなくてはいけない。
「……やはりルドルフは独立を狙っていたか…」
ゲルマニア皇帝フリードリヒは頭を抱えた。
「最初はトリステインへの警戒のためだと思っていたが、最近ルドルフ領が独立するのでは？　という噂が流れたから探りを入れた途端に独立されるとは……完璧に出遅れたな…」
フリードリヒは枢機卿に言う。
「…はい、恐らくルドルフは今の領土を授かってから直ぐに準備していたようで、動きが恐ろしく早いです。
我々は極最近まで疑いもしませんでした」
そう、最近まではそう思っていたのだ。

もしかして独立する気では？　と考えた事はあるが何も証拠も無かった。
それよりもトリステインとの緊張状態の方に目がいっていたし、多額の献金のおかげで帝都の財政が潤い、ルドルフ領の事は大抵の事は目を瞑っていたのだ。
それらのツケが一気に来たらしい。

「それで、軍の集結はどうなっている？」
「はっ、国軍は現在集結は順調ですし、戦争準備を進めていますが、残念ながら諸侯軍の集結は間に合わない可能性があります」
「……やはり準備不足が祟ったか」
急な有事に備えて国軍は常に備えているが、各領を守る諸侯軍は集結にどうしても時間がかかる。
「まぁ、今日宣戦布告されたが本格的な戦闘になるのはもう少しかかるだろう。
それまでに出来る限りの軍勢を集結しなくては」
普通ならその考えで間違っていない。
空中を飛ぶフネや竜の航空部隊なら早く来る可能性があるが、主戦力は陸軍だ。
空中艦隊では攻撃力が高くても積める戦闘員はたかが知れる。
つまり攻撃した地域を占領する事は出来ない。
占領するにはどうしても大量の兵士が必要になる。
ハルケギニアで大量の兵士を動員するには陸路が一般的だ。
というか陸路以外無い。
フネを飛ばす風石は貴重だからあまり詰めれず、完全武装した兵士を満載すれば重量のせいで直ぐに定員オーバーになる。
だから大軍を派遣するのに向いてないので陸路に頼るしかないのだ。
フリードリヒの考えは間違ってはいない。
ハルケギニア基準で考えるのなら。

１０　独立戦争

ツェルプストー領に進軍するドイツ軍は先ずは航空戦力、零戦を投入した。

ツェルプストーサイド

現在、ドイツとの国境周辺を風竜や火竜の竜部隊が守っていた。
突如隣のルドルフ領が独立してゲルマニアに宣戦布告してきた。
それも独立と宣戦布告を同時に。
そのせいで旧ルドルフ領の隣にあるツェルプストー家は大混乱だった。
何せ自家は皮肉にもゲルマニアでも上位に入る貴族で、戦力もゲルマニア有数だ。
そんな有力な敵が隣にいるなら真っ先に攻めるのが普通。
だからツェルプストー辺境伯は混乱しても直ぐに立ち直り、領内の軍を集結させた。
本来ならそのまま国軍にはせ参じて合流すべきだが、間違いなく自領に攻め込んで来るのだ。
だったらここで少しでも時間稼ぎをして諸侯軍が集結出来るようにするべきだろう。
ルドルフ軍、現在はドイツ軍の戦力は未知数で、最近急激な軍拡をして戦力をかなり上げたらしいが、自家は永きに渡ってゲルマニアでトップクラスの戦力を誇っているのだ。
トリステインとの戦争ではあのヴァリエール家を相手に互角に戦ってきた。
たかだか数年でのしあがった奴等に自分達が負ける筈は無い。
そう確信していた。

竜部隊を率いるエンリコは自分の使い魔である火竜を撫でながら敵を待つ。
旧ルドルフ軍は竜の数は少ないと聞いたから竜での攻撃は仕掛けて来ないと思うが、偵察として寄越すかも知れないし、フネの艦隊で来るのならその接近を味方に知らせに行く事が出来る。
だから彼等は国境周辺の空域で構えているのだった。

しばらく哨戒飛行を続けていると、前方から何かが来る。
それは集団なのか、黒い点々が沢山ある。
「前方から何かが接近、恐らくルドルフ軍の竜部隊だろう！！
戦闘用意！！」
部下達に戦闘準備をさせる。
まだ何かは見えないが、あの早さは風竜だと思った。
しかし、それは間違いだった。
敵との距離が詰まってくると、敵の姿が明らかになった。
「なっ…何なんだ、あれは……？」
思わずエンリコは口に出したが、竜部隊全員が思った事だった。
基本的に竜を使い魔にするのや、竜を乗りこなすのは風メイジだ。
風メイジは他のメイジと比べて目が良いので、遠くのものもハッキリ見える。
その彼等が見たのは理解不能な物体だった。
明らかに生き物ではない、何かが飛んでくる。
その姿はカヌーに翼を取り付けたかのような姿。
「…あんなのが飛ぶ筈は無い…」
誰が言ったのかは分からないが全員が頷く。
自分達の常識の範囲内で飛ぶと言えばフライをするメイジや竜、フネだ。
あんなよく分からない物体が飛ぶなんて考えられない。

人は理解不能な事態に陥ると安全装置が働くのか、停止してしまうのだ。
それが戦争のような非常時においても働いてしまう。
今回も彼等にとって理解不能な場面に出くわしてしまったので一様に停止した。
しかし敵はそんなことを考慮してはくれない。
彼等の常識外のスピードで接近し、気付いた時には敵の射程距離内にいてしまった。
部隊の一番端にいた風竜を敵が攻撃した。
銃が連続して発射しているかのような音が聞こえ、風竜や乗り手が穴だらけになり、墜ちていった。
それを見てエンリコ達は正気に返った。
「全員散会！！」
エンリコの命令に集まっていた部隊が離れ、個別に戦闘を始めた。

しかし、それは戦闘と呼んで良いモノでは無かった。
墜ちていくのは全部竜達、つまりは味方だけ。
こちらが火竜の猛烈なブレスで攻撃を仕掛けようが、敵は簡単にかわす。
いや、攻撃を仕掛ける前に既にかわしているのだから追い付いてもいない。
一方、敵はどんな攻撃をしているのか分からないが次々と味方を落としていく。
火線のような物が当たったと思ったら味方は穴だらけになったり、バラバラになって死んでいく。
その姿に恐れをなした味方が勝手に逃走しようとしたが、敵は許さず、わざわざ追いかけていって落とした。
そして落とした敵はまたこっちに来る。
敵の数は一向に減らず、味方はどんどん減っていった。

気付けば残っているのは自分と数騎だけ。
「くっ、一体何なんだお前らは！？」
エンリコは叫ぶ。
心の底から思っている疑問を尋ねた。
しかしその返答は２０ｍｍ機関砲の連射だった。
機関砲弾がエンリコに命中し、エンリコは即死した。
彼の使い魔もエンリコ同様、バラバラにされて母なる大地に墜ちていく。
そんな彼らを上空からまたもやこの世界ではあり得ない鉄のフネの艦隊が横切っていく。
しかし艦隊にいる人間は彼らを見なかった。
彼らはこれから始まる初の実戦に向けて興奮と緊張状態なため、目に入らなかったのだった。

ツェルプストー軍本隊はルドルフ軍を待ち構えていた。
持てる兵力を総動員して待っていた。
普通なら個人で所有していないのだが、やはりそこはゲルマニアでもトップクラスの軍だからかフネの艦隊がいた。
艦隊と言っても数隻だけだから微妙だが、普通フネは国軍や王軍が所有しているのだから、ツェルプストー軍の規模の大きさを感じる。
他にも地上には１万を超える兵士が待ち構え、敵との陸戦に備える。
そして総司令官たるツェルプストー辺境伯も地上部隊の中にいた。
ツェルプストー軍全員でルドルフ軍を待っていると、敵の艦隊が見えてきた。
味方の偵察部隊が帰ってこなかった事から多分撃墜されたのだろう。
そうツェルプストー辺境伯は考えていると、ツェルプストー辺境達もエンリコ達同様に止まった。

前方から来るのは明らかに大型のフネの艦隊だが、それだけなら別に驚きはしない。
艦数も自分達と同程度なんだが、艦様がまるで違った。
「鉄…で出来ている？」
ツェルプストー辺境伯は呟く。
「何故…鉄で出来ているのに浮かぶのだ…？」
誰かに聞くが、誰も答えられない。
ツェルプストー軍全員が呆然とただドイツ軍艦隊を見ていると、敵が発砲した。
「敵艦発砲！！」
部下が叫ぶが
「…案ずる事は無い。まだ敵との間は５リーグはある。ただの威嚇だろう」
ツェルプストー辺境伯は正気に返った。
そう、大砲の射程距離は精々が２リーグ。
その倍以上の距離から発射しても当たる筈は無い。
そう、常識なら。
ダァァァァァン！！！
敵砲弾は見事に味方に命中した。
「なっっ、当たっただと！？
あり得ん！！　一体どんな魔法を使ったのだ！？」
ツェルプストー辺境伯がそう叫んでも間違っていない。
大砲の射程距離は２リーグという常識が覆されたのだ。
何かの魔法と考えても何らおかしくないだろう。
しかし敵はいちいち質問に答えてくれる筈もなく、無慈悲に１５．２ｃｍ砲弾を撃ち込む。
最初は３０ｃｍ砲弾を撃ち込もうと思っていたのだが、敵の艦数が数隻なので無駄と艦隊指揮官は判断して副砲での攻撃にしたのだ。
しかし敵には副砲でも大きすぎたのか、たった数発も食らうとどんどん高度を落としていく。

風石庫に命中して風石が漏れているのだろうか。
最早戦闘行動は不能そうだが、一応止めを刺すために再び砲撃する。
すると艦体上部が吹っ飛び、落ちた。

そもそも木造船で鉄鋼船に挑むのが無謀としか言い様が無い。
例え奇跡的に向こうの砲弾が当たったとしても球形弾やぶどう弾などの鉄の玉ではどうにもならない。
ただ弾かれるのがオチだ。
中には榴弾もあるらしいが、榴弾では近くにいる人員を殺傷することは出来ても船を沈めるのは不可能だ。
オマケにその榴弾は作るのに魔法が必要だからあんまり数が揃わない。
だからどうやってもツェルプストー軍の艦隊はドイツ軍の艦隊に勝てない。
大人と子供の殺し合いに等しい。
大人がライフルを持って防弾ベストを着て、子供は裸で水鉄砲だけ。
勝てる訳が無い。

私は夢を見ているのだろうか？
目の前に広がる光景は我が艦隊の残骸や死体だらけ。
結局敵は一隻も墜ちることなく味方を全滅させた。
「…ルドルフ軍の空海軍がこれほど迄に強力無比だったとは…」
誰が思うだろう。
幾ら強いかも知れないと分かっていたとしても、これ程とは誰も思わなかった筈だ。
呆然としていると敵の艦隊が降下してきた。
どうやら地上戦を始める気らしい。
よし、艦隊決戦については言い分けもしようがない程に惨敗だが、地上戦ならそうはならないだろう。

ツェルプストー辺境伯は激を飛ばす。
「皆の者、とうとう裏切り者との決戦が始まる！！！
奴等ルドルフ家はゲルマニアに仇なす裏切り者だ！！！
ここで我等が食い止めねば首都が危険に陥る！！！
逆に食い止められれば国軍や諸侯軍も集結し、必ずや我々が勝利する！！！
我等が忠義、あの裏切り者共に思い知らせてやるのだ！！！」
先程までの決戦は無かった事にし、これから始まる地上戦こそが決戦だとすり替えた。
しかしそんな考えが通じたのか、ツェルプストー軍の士気は上昇した。
そんな中でもドイツ軍の艦隊は降下を続ける。
ツェルプストー軍はドイツ軍の艦隊が着地して歩兵を吐き出すのを待つ。

しかしその願いは裏切られた。
ある程度降下したら艦隊は降下を止めた。
ツェルプストー軍は「何をする気だ？」と見ていると突然、ドイツ軍の艦隊が地上にいるツェルプストー軍に向けて発砲した。
ダァァン！！　ダァァン！！
固まっていたツェルプストー軍に直撃、甚大な被害が出た。
その砲撃を皮切りに、他の艦も次々７．６ｃｍ砲を撃ち始めた。
これは主砲は無理だが、副砲は下も撃てるように改良されていて、ガンシップも出来るようになっている。
ガンシップより恐いのは、風石を積んだフネなら浮いたまま停止も出来るので逃げられない。
ゆっくりと移動してツェルプストー軍を殲滅して回る。
ツェルプストー軍もただ撃たれるだけではなく、逆に大砲で撃ち返す事もあるが、船底は特別分厚い装甲で覆われているのでビクともしない。

ツェルプストー家自慢の火系統の魔法を放っても弾かれて終わる。
逆に魔法を使えば集中的に砲撃や機銃掃射を食らうのだった。
「おのれ卑怯な！！
貴族なら貴族らしく正々堂々戦え！！！」
ツェルプストー辺境伯が喚くが、艦隊にいるのは全員軍人だし、「戦争は卑怯な者が勝つ」と教育されているので無視する。
しかしそれでも喚くので特別に１５．２ｃｍ砲弾を撃ち込んで黙らせた。
黙らせるどこか跡形も無く吹っ飛んでしまったが。
ツェルプストー辺境伯の死を見て、次々とツェルプストー軍が敗走し始めるが、それを見逃すお人好しでは無いので追いかけてぶっ飛ばす。

１万から５００人以下に減ったので、遂に艦隊は着地し、歩兵を吐き出した。
歩兵は微かに生き残ってた兵士達を始末し、そのままツェルプストー本家に向かう。
そして屋敷に到着したら降伏勧告を行う。
「既に大勢はついた！！
大人しく降伏せよ！！」
別にどっちでも良いのでおざなりな降伏勧告だ。
そのせいか黙殺された。
降伏の意思無しと受け取り攻撃命令を出す。
榴弾砲や迫撃砲、重機関銃で僅かに残っていた警備達と一緒に屋敷を攻撃する。
屋敷は崩壊し、豪華な見た目から一気に廃墟に変わった。
残党狩りとして屋敷や周辺をくまなく捜索すると、逃げようとしたのかツェルプストー夫人と護衛や使用人が屋敷近くの森にいた。
何か夫人が「私は構わないですがこの者達の命は助けて下さい」と

か言ったらしいが、兵士達は気にせず機銃で皆殺しにした。
司令官から「ツェルプストー家の関係者は皆殺しにしろ」という命令を受けているからだ。
まぁその司令官も総司令官であるルドルフ皇帝に命じられ、ルドルフ皇帝は俺に命じられている。
貴族関係者を残すと後々面倒になるからな。
基本的にウチの領出身以外の貴族は皆殺しにする。
信用出来ないからな。

11　戦争終結

ツェルプストー領侵攻と同時に、首都への侵攻作戦も開始した。

陸軍と空海軍に分かれ、陸軍は陸路で首都までの敵の殲滅や各領地の占領、線路の敷設などの補給路の確保。
空海軍は首都まで一気に攻め込み、中央の占領と皇帝フリードリヒの抹殺。
ちなみに陸にも空海にも零戦がついているから制空権は独占出来る。
ツェルプストー家以外はフネの艦隊を所有してないから零戦でも十分だ。
まぁいざというときは高射砲で撃ち落とすがな。
動きが鈍いフネを落とすのは容易い。

ゲルマニアサイド

帝政ゲルマニア皇帝フリードリヒは急いでいた。
何を急いでいるのかと言うと、諸侯軍の集結だ。
自分の直接の指揮下にある国軍の編成は何とか終了させたのだが、残念ながら数が足りない。
というのも国軍のほとんどが艦隊の指揮官や乗員だ。
歩兵の数が少ない。
流石の国軍でも常時大量の歩兵などの正規軍を雇う金は無い。
だから歩兵はほとんどが諸侯軍に頼っているのだ。
一応国軍の方でも臨時徴兵をかけて数を揃えようとしているが時間が足りない。

何せただ徴兵しただけでは兵士にならない。
先ずは装備を与え、ある程度訓練をしなければ軍としての動きが出来ない。
装備を与えただけで前線に行かせても逃げ惑うか勝手に動き回るだけだ。
だから最低限の訓練を施す必要があるのだ。

しかし敵はいちいち待ってくれない。
敵国となったドイツ帝国は何年も前からこの戦争に備えていたのだ。
準備は出来ている筈。
だから宣戦布告してきたからには間違いなく大軍でこちらへ攻めてくる。

恐らく最初は隣のツェルプストー領を攻めるだろう。
ツェルプストー領はゲルマニア国防の要だ。
そんな敵を真っ先に叩かない訳は無い。
ツェルプストーがどれほど時間を稼いでくれるか分からないが、それほど時間をかけずにこっちに来るだろう。
旧ルドルフ軍にどれほどの戦力があるのかは分からないが、いきなり独立して宣戦布告までしてきたのだ。
かなりの自信がある筈。
しかしツェルプストーもそう簡単には負けんだろう。
艦隊を所有しているし、陸軍もかなりの数を揃えている。
もしかして一月以上も持ちこたえられるかも知れん。
それだけあればある程度諸侯軍も集結するだろうし、徴兵した兵士達も訓練を修了出来る。
そうなれば反撃にも転じる事が出来る。

恐らくその前に艦隊で首都を攻撃しにくるだろうが、こちらもただやられる訳ではない。

既に艦隊の編成は終了して戦闘体制も整った。
今は出撃して旧ルドルフ軍を待つ。
確かルドルフ領は2年程前から何隻かフネを購入していたから既に訓練も終了し、それらを投入してくるだろう。
それなら勝機はある。
何せこちらは１００隻以上の艦隊を誇り、最新のフネが多数を占める。
ルドルフ領に売り払ったフネは旧式だから最新艦には勝てまい。
量、質ともに勝る国軍が負ける筈は無い。

ドイツ帝国サイド

艦隊の旗艦であるボリス級戦艦にて、皇帝ボリス・フォン・ルドルフが演説を始めた。
「遂にゲルマニア国軍との決戦が始まる！！
奴等ゲルマニアは我等の独立を認めず、我等を殲滅せんと準備している！！！
奴等を、フリードリヒを殺せ！！！
奴を殺れば後に残るは雑魚ばかり！！
別動隊はツェルプストー領侵攻を既に始めている！！！
我々も遅れることなく戦果を上げるのだ！！！
自由と主権を勝ち取るため、必ず勝利するのだ！！！
ドイツ帝国万歳！！！」
「ドイツ帝国万歳！！！！！！！」
「皇帝陛下万歳！！！！！」
演説が終了し、士気を上げる事に成功した。
まさか誰も思わないだろう。
ボリスの演説内容は事前にハンスが書いた原稿に沿っていたとは。

多少ボリスもその場の空気をよんでアレンジもしたが、ほとんどはハンスが書いた通りに演説したのだ。
ちなみにハンスは旧ルドルフ領から出なかった。
何故ならどちらかの艦隊に乗ってもしも予測不能な事態に陥って死亡するかも知れない。
だから一番安全と思われる旧ルドルフ領から出ない。
今は核シェルター並みに強化した要塞に引きこもっている。
報告や命令伝達については、無線技術は完成はしているがまだまだ未熟で雑音が激しいし、遠くまで届かないので電信を使っている。
大まかにだが戦況を把握している。
ちなみにツェルプストー領に侵攻した部隊から決戦が終了したと連絡してきた。
今から残敵掃討とツェルプストー家に攻め入るらしい。
間もなく終わるだろう。

ゲルマニアサイド

哨戒飛行に出ていた風竜部隊が戻ってきて、敵艦隊の接近を報告してきた。
「敵艦隊の艦数はおおよそ５０隻程でした」
「なっ、５０隻だと！？」
フリードリヒは驚愕する。
自分達の掴んでいる情報はゲルマニアが売った数隻だけだ。
どうやって５０隻も揃えたのか？
数隻程度なら自分達で建造する事も出来るだろうが、１０隻以上も建造するのは２年では足りない。
「一体どうやって揃えたのだ…？
もしやトリステインかアルビオンから買ったのか？」

それしか考えられない。
トリステインならゲルマニアの戦力低下をさせるために独立を支援している可能性も考えられる。
もしくはアルビオンがトリステインの要請でフネを売ったのかも知れない。
だとしたら不味い。
「そうなると敵はルドルフだけではなく、トリステインやアルビオンも加わるかも知れん」
流石に2国を同時に相手をしながらルドルフと戦うのはキツイ。
負けるかも知れないのだ。

フリードリヒは知らない。
重要なのは数ではないということを。
哨戒部隊は遠目に確認しただけなので敵のフネが鉄鋼船というのは確認出来なかった。
変わったフネだな。とは思ったが、自分の常識を捨てられないので脳内で木造船に変換してしまったのだ。

ドイツサイド

監視員が大声で叫んだ。
「前方に敵艦隊視認！！！！
ゲルマニア艦隊です！！！」
その言葉を聞き、指揮官が叫ぶ。
「総員、戦闘配置に就け！！！！」
指揮官の言葉に従い、全員が配置に就いた。
全員が興奮と緊張をしている。
何故なら全員実戦は初めて。

厳しい訓練はしてきたが、やはり実戦は空気が違った。
「いよいよだな」
「あぁ、実戦だな」
１５．２ｃｍ砲を操作する二人は小さい声で会話する。
「まぁあんだけ厳しい訓練しまくったから実戦だろうと楽勝だろう」
「そうだな。
相手はゲルマニア艦隊。みんな木造船だ。
…逆に負けたらヤバイな…」
「…あぁ、確かに。
指令部に殺されそうだ……」
二人が話していると段々敵との距離が詰まってきた。
距離６リーグに近付いた時
「砲撃始め！！！」
命令が響いた瞬間、主砲以外の全部の砲が鳴り響いた。
ダァァァァァン！！！
デカイ音が艦隊中に響いた後、沈黙が流れる。
そして少しした後、敵艦隊が爆発した。
「良し、命中！！」
艦隊中に歓声が上がった。
「まだ一発だけだ！！！
続いて二発目装填！！」
上官の言葉に全員が気を引き締める。
上官の言葉通り、まだ始まったばかりなのだ。

ゲルマニアサイド

ドイツ軍では始まったばかりだが、ゲルマニア軍は最早終わりそうだった。

「シャルル・マーニュ号墜落！！！
自艦も危険状態です！！！」
ドイツ艦隊との戦闘が始まったのはほんの少し前だった。
しかし、今やゲルマニア艦隊の半数が戦闘不能や墜落した。
敵の信じられない程の遠距離一斉射から始まった戦闘は完全なるワンサイドゲームだった。
根性があるフネは何とか接近するのだが、その前に集中放火を受けて落とされる。
逆に逃げたとしても集中放火を受ける。
見た目イジメだった。

そんな艦隊を下で見ているフリードリヒは呆然としていた。
フリードリヒ以外の指揮官や兵士達も呆然とするだけ。
確かに圧勝出来るとは思わなかったが、これ程までの差は考えられなかった。
「…何故あんなにも遠くから撃てるのだ…？」
王の疑問は全員の疑問だった。
近いフネでも４リーグは離れている。
オマケにあんなに遠いのに味方のフネを次々沈めていっている。
何故あんなに遠いのに威力を保てる？
様々な疑問は尽きない。
しかし分かっている事もあった。
それは、艦隊決戦は負けるという事だ。

艦隊決戦が終了した。
結果は言うまでもない。
ドイツ軍の圧勝だ。
少し離れた所には味方のフネの残骸や死体が転がっている。

微かに生き残りもいたが、戦闘は終了してないので救出活動は出来ない。
これから陸上戦が始まるのだから。

陸上戦については多少自信があった。
何故なら持てる限りの時間を費やし、土系統のスクエアクラスが陣地を構築したのだ。
防御拠点は鉄で固めてあるし、攻撃拠点には火のスクエアやトライアングルなどの攻撃に長けたメイジや、大砲や銃で固めた平民の部隊もいる。
空中決戦では惨敗したが、陸上決戦では勝利出来るかも知れない。
それに、勝利出来なかったとしても時間さえ稼げれば諸侯軍が援軍としてやってくるからそれで勝てば良い。
そのため、陣地も防衛に力を入れているので防御力は高い。
如何に旧ルドルフ軍が強大でもこの陣地を攻略するのは困難必至である。
そう自信を持っていた。
敵の攻撃が始まる前までは……。

ドイツサイド

艦隊決戦に勝利したドイツ軍は次なる決戦として輸送船に満載していた陸戦隊や歩兵達を降ろす準備を始めた。
しかし、その前にやることがある。
「制圧射撃用～意！！！」
その言葉に、主砲が動き出した。
３０ｃｍ砲が動く様は圧巻だった。
「目標、敵防御陣地！！！

弾種、榴弾！！！」
その指示通りに狙いがつけられ、装弾した。
「奴等に恐怖を味あわせろ！！
砲撃開始！！！」
その言葉の直後、各艦の前方の３０ｃｍ砲２門が爆発したような音を鳴らす。
ダァァァァァァァァァァン！！！！！！！
大して遠くない所を撃ったためか、着弾音がハッキリと聞こえる。
ドガァァァァァァァァァァン！！！！！
という凄まじい音とともに、あんなに堅牢そうだった敵防御陣地が破壊された。

ゲルマニアサイド

陣地中にとんでもない爆発音が鳴り響き、煙が上がった。
少しして、煙が晴れてそこにあった光景はまさに地獄。
陣地は破壊されその役割を果たしていない。
陣地の近くにいた味方の死体はバラバラになった物や中途半端に残っている物。
生存者もいるにはいるが、大抵は腕や足を失ったり、陣地や砲弾の破片が突き刺さって瀕死の状態。
むしろ死んだ方がマシかも知れない光景が広がっていた。
「……一体…何が起きたのだ……？」
皇帝の言葉に答えられる人間はこの場にはいなかった。
全員が地獄のような光景を見て唖然としたり、吐き出している者もいた。
この世界でここまでの威力のある兵器は存在せず、精々がスクエアクラスの広域魔法ぐらいだ。

確かにスクエアクラスのメイジが何人かで攻撃すれば悲惨な状態にはなるが、ここまでの光景はなかなか無い。
騎兵同士で戦うのが主なハルケギニアで、火力同士の戦いは必然的に少ないので唖然とするのは仕方がなかった。

しかし敵はそんなことは知ったことか。と言わんばかりに砲撃を続ける。
その砲撃によってまたもや陣地は破壊され、着弾付近では地獄が始まる。
ゲルマニア側もただやられている訳ではなく、何とか攻撃を仕掛けるが相手は空中。
攻撃が届かない。
しかし中には勇気のある者がいるらしく、竜やグリフォンに乗って勇敢にも艦隊に勝負を挑む貴族もいるが、機銃に迎撃されたり、上空で待機していた零戦によってハエみたいに叩き落とされる。
中には攻撃に成功してブレスを命中させて乗員を死傷させる事に成功したが、代わりに復讐として集中放火を食らい、竜諸ともバラバラになって撃墜された。

この悲惨な戦況に最早これまでとフリードリヒは退却を始めるが、その直後に３０ｃｍ砲弾の直撃を食らい、死体すら残さずに消えた。
王が死んだ事によって本格的にゲルマニア軍は敗走し始めた。オマケにその敗走も秩序たったモノではなく、自分勝手にバラバラに逃げているだけだった。
ゲルマニア軍の敗走を確認したドイツ軍は残敵掃討として副砲にて掃射を開始した。
僅かに生き残っていた者達も母なる自然に帰っていった。

首都ヴィンドボナへ到達したドイツ軍は首都入城前に降下し、兵士を降ろして堂々と行進を開始した。
軍楽隊の演奏をバックに行進するドイツ軍を市民は初めは恐怖から目を背けたが、段々とその堂々とした格好良さに目を向ける市民も現れてきた。
国旗をたなびかせ、全く乱れることなく秩序立って行進する様はどこか人間を引き付ける。
強さを感じるからか？
上空にはドイツ軍の艦隊も飛んでいる。
「あぁ、ゲルマニアは負けたのか…」
と誰もが確信した。

王城に到着したドイツ軍は形式通りに降伏勧告を実施。
ツェルプストー家のように拒絶されるかと思いきや、直ぐに降伏を受諾。
王妃や王子達が出て来てドイツ軍に膝をついた。

これでドイツ独立戦争は終結した。
ゲルマニアの敗北を発表し、諸侯に対して臣従命令を下す。
しかし大抵の旧ゲルマニア貴族は臣従せずにそれぞれ独立して反ドイツ感情を露にするが、中には臣従命令を受け入れる貴族もいた。
まぁほとんどは戦力が乏しく、戦っても勝てる自信が無いから服従してきた奴等だった。
中には有力貴族でそれなりの戦力を有しているが、時代の流れを感じてこちらに来る頭の良い貴族もいた。
そいつらは何とか新たな皇帝に取り入ろうと親父に謁見して様々な献上品などをするが、そんなの聞く気が無い俺はそいつらを指輪で支配した。

処刑しても良いんだけどまだ早い。
今処刑すれば臣従しても助からないと思われたら面倒だ。
だから頭の良い奴等は支配しとく。
邪魔になる可能性が高いしな。
バカは生かしておいて良いや。
後々何か罪をつけて適当に処分すれば良いし。

独立成功して先ずやるべき事は旧ゲルマニア平定だ。
独立した領もあるけど承認してないから反乱勢力でしかない。
他の国が承認なんて面倒なことする前に潰す。
と言ってもやることは前と同じ。
零戦や艦隊を差し向けて主戦力を崩壊させ、反乱を起こしたとしてその領の貴族を皆殺しにする。
そして後から来た陸軍が残敵掃討や線路を敷設して補給線を形成、そして占領。
それを1ヶ月続けて旧ゲルマニアを平定して正式にドイツ帝国となった。

各国にドイツ帝国を承認して貰うためにロマリアへ莫大な寄付と古い教会の改修や新たな教会の建設費用も出した結果、ロマリアが正式にドイツ帝国を承認。
そのため、仕方なく他国もドイツ帝国を承認した。
宗教が何よりも力を持つハルケギニアで、ロマリアが承認した国家を承認しないというのは異端認定されかねないので従うしかない。
こういう時だけロマリアって便利だよな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6834x/

ゼロの使い魔～ハルケギニア統一に向けて～

2011年10月28日20時29分発行